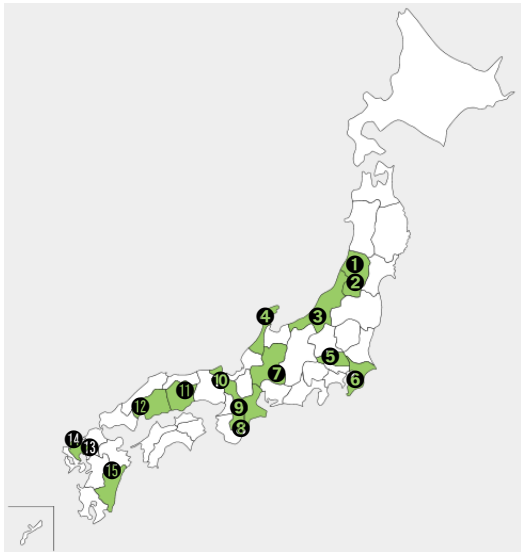


■ 目次

I. 棚田の優良事例集 (1~30頁) (冒頭: 事例集活用ガイド)

整理番号	棚田名	所在地	地理的優位性 ※1	耕作面積 ※2	開発起源	取組の工夫(キーワード)※3													中山間地域等直接支払交付金の活用	多面的機能支払交付金の活用	頁	
						きっかけ	多様な人材の活用				経済の流れを起こす					保全団体						
							地域内体制整備	外部との連携 (田舎で働き隊)	地域おこし協力隊	オナー制度	企業(CSR)	学生、ボランティア	棚田米販売	6次産業化	都市農村交流		農泊	教育				移住促進
①	榎平の棚田	山形県朝日町	△	中	近代	◎		◎			○	◎	◎	◎				◎	任意団体	○	○	1
②	大藤棚田	山形県山辺町	△	中	近世		◎			◎	◎	◎	◎		○			◎	任意団体	○	○	3
③	池谷・入山	新潟県十日町市	△	中	近世		◎	◎	○		◎	◎	◎	○			◎	◎	NPO	○	○	5
④	白米千枚田	石川県輪島市	△	小	近世		◎		◎	○		◎							公益財団			7
⑤	寺坂棚田	埼玉県横瀬町	◎	小	中世		○		◎	○		○							任意団体	○		9
⑥	大山千枚田	千葉県鴨川市	◎	小	近世		○	◎	◎	○		◎	◎	◎	◎	○			NPO	○		11
⑦	坂折棚田	岐阜県恵那市	△	小	近世	○		○	◎	◎	○	◎	◎						NPO	○	○	13
⑧	丸山千枚田	三重県熊野市	△	小	中世	◎			◎	○	◎	◎	◎	○					任意団体	○		15
⑨	稲淵棚田	奈良県明日香村	◎	大	古代	◎			◎		○	○							NPO	○	○	17
⑩	毛原の棚田	京都府福知山市	◎	小	古代	○			◎	○	◎	◎	◎	○	○				任意団体	○		19
⑪	上山の棚田	岡山県美作市	△	大	古代		◎	◎		◎	◎	◎	◎	○			◎	◎	一般社団			21
⑫	井仁の棚田	広島県安芸太田町	○	小	中世	○		◎	○	◎		◎			◎				任意団体	○	○	23
⑬	江里山の棚田	佐賀県小城市	△	中	中世	○				◎	○	◎							任意団体	○	○	25
⑭	藤野の棚田	佐賀県唐津市	△	大	近世	○				◎	◎	◎	◎		○				NPO	○	○	27
⑮	秋元	宮崎県高千穂町	×	小	不明	◎		○				◎	◎	◎					株式会社	○		29



※1(地理的優位性)
 ◎: 東京・大阪から車で2時間以内かつ100万人都市から車で1時間以内
 ○: 東京・大阪から車で2時間以内又は100万人都市から車で1時間以内
 △: 100万人都市から車で2時間以内又は10万人都市から車で1時間以内
 ×: その他

※2(耕作面積)
 大: 20ha以上
 中: 10ha以上、20ha未満
 小: 10ha未満

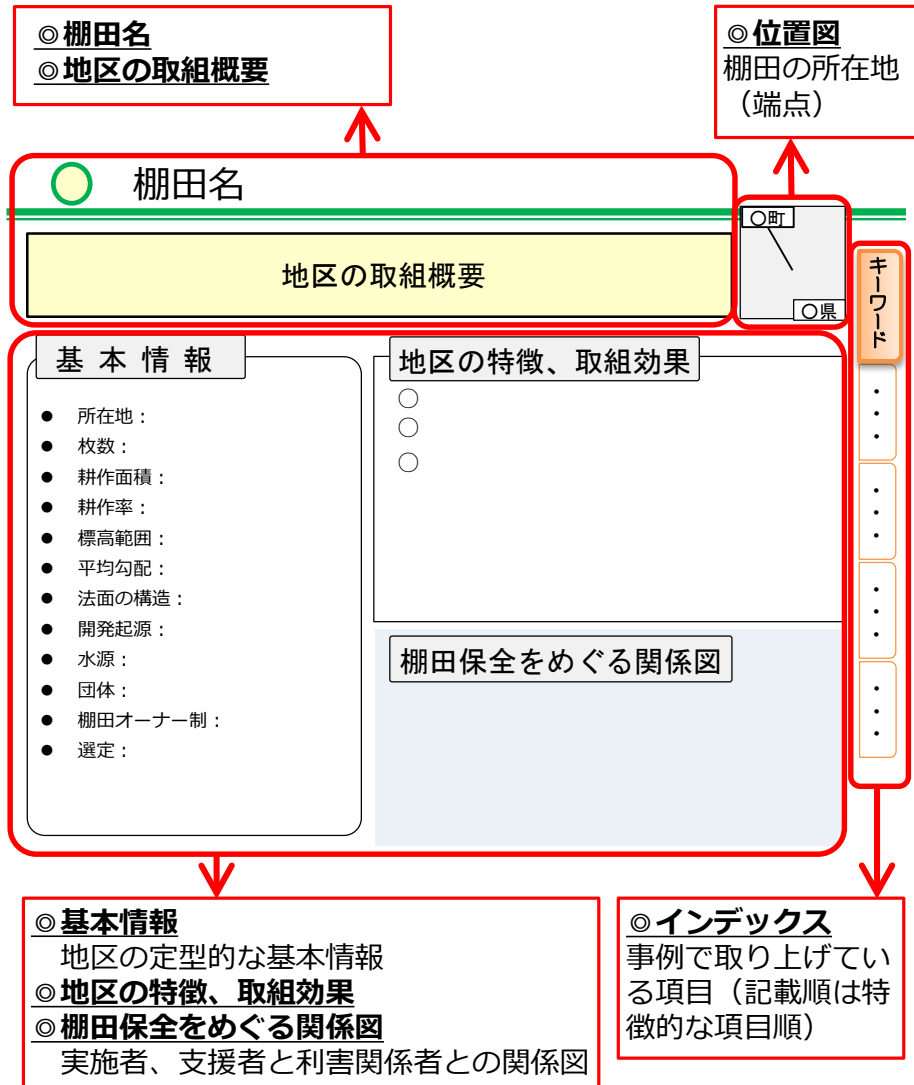
※3(取組の工夫(キーワード))
 ◎: 特に優れた取組を実施
 ○: 優れた取組を実施
 空欄: 取組実施なし
 <事例集で取り上げている取組には色付け>

※4(ソーシャルビジネス)
 ここでは、地域社会の課題をビジネスを手段として解決しようとする取組のことを指す。

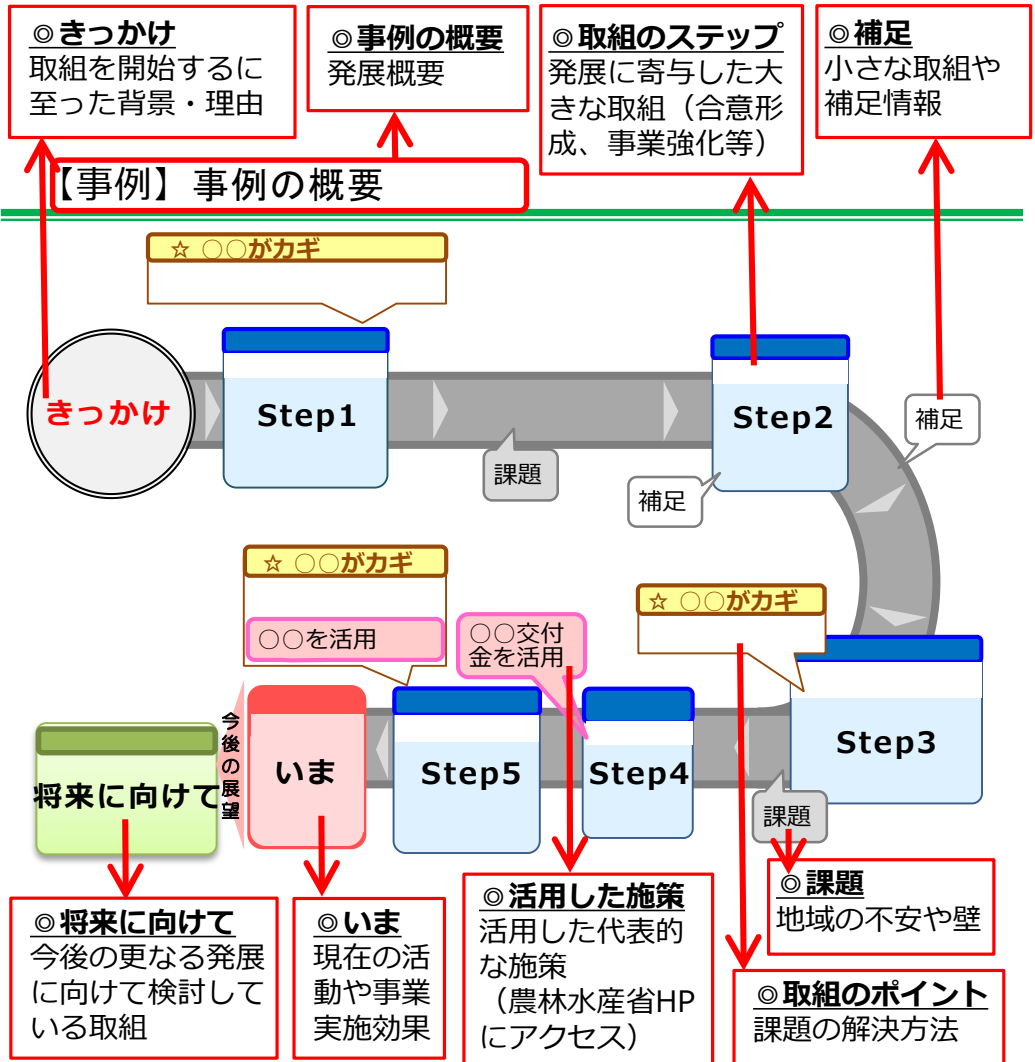
■ 事例集の活用ガイド

地域の特性を活かした特色ある発展を実現した地域を優良事例として2枚1組で紹介します。

【1枚目】 棚田や取組の特色を以下の項目で紹介します。



【2枚目】 取組の流れを経時的な一連のプロセスとして整理します。





キーワード
地域内
体制整備
棚田米販売
地域おこし
ソーシャル
都市農村交流
ボランティア

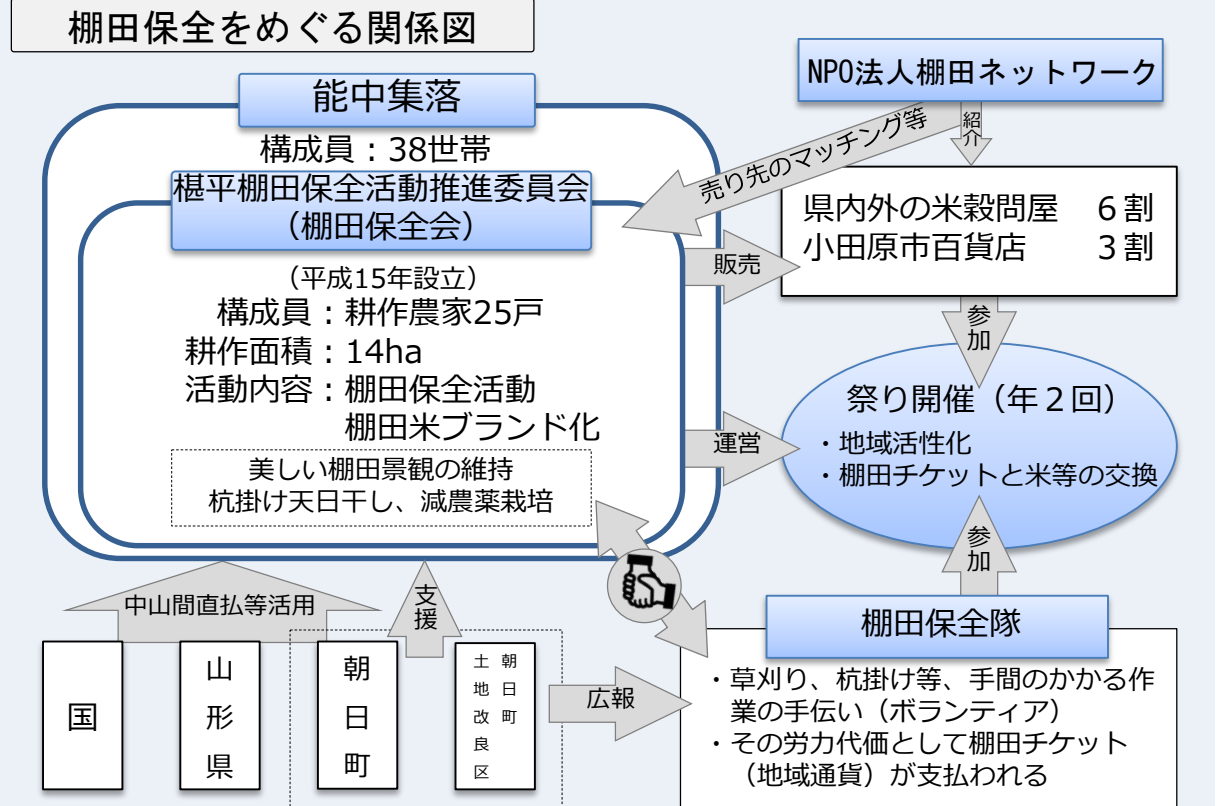
○ みんなの財産「棚田」を守るためワークショップ（WS）による地域での話し合いを重ね、できることから地道に実践した結果、棚田米のブランド化に成功し、棚田と地域の保全につなげている。

- ### 基本情報
- あさひまちくぬぎだいら
- 所在地：山形県西村山郡朝日町椴平
大字三中（山形駅から車で40分）
 - 枚数：約190枚
 - 耕作面積：約14ha
 - 耕作率：約95%
 - 標高範囲：200～225m
 - 平均勾配：1/20
 - 法面の構造：土羽
 - 開発起源：昭和17年
 - 水源：油子沢、最上川
 - 団体：椴平棚田保全活動推進委員会
 - 選定：日本棚田百選(H11)、美の里づくりコンクール(H17)、山形棚田20選(H19)



(左) 棚田保全活動に賛同、協力してくれる隊員を広く募集し、水路や展望台の草刈り、秋の杭掛けや稲刈り、脱穀、ヒメサユリの球根植栽などの活動を行っている。
(右) 天日干し自然乾燥の米「つや姫」は、朝日町ふるさと納税の返礼品にもなった。

- ### 地区の特徴、取組効果
- 「椴平の棚田」は、高台の農村公園から俯瞰でき、扇の形状に見える眺望が素晴らしく、町民の自慢のひとつである。
 - 「日本の棚田百選」に選ばれたものの、条件の悪い棚田での作業のため、荒廃と離農が進む状況にあった。このため、棚田保全会を立ち上げ、話し合いを進め、保全活動をスタートさせた。
 - 保全活動により、原風景がよみがえり、今では年間6,000人の観光客が訪れるまでになり、米のブランド化にもつながっている。



【事例】ワークショップ（WS）による話し合いを基に、できることから実践





○ 地域内外・農家非農家を問わない「協働の力」で棚田の再生と地域の振興を図っている。

基本情報

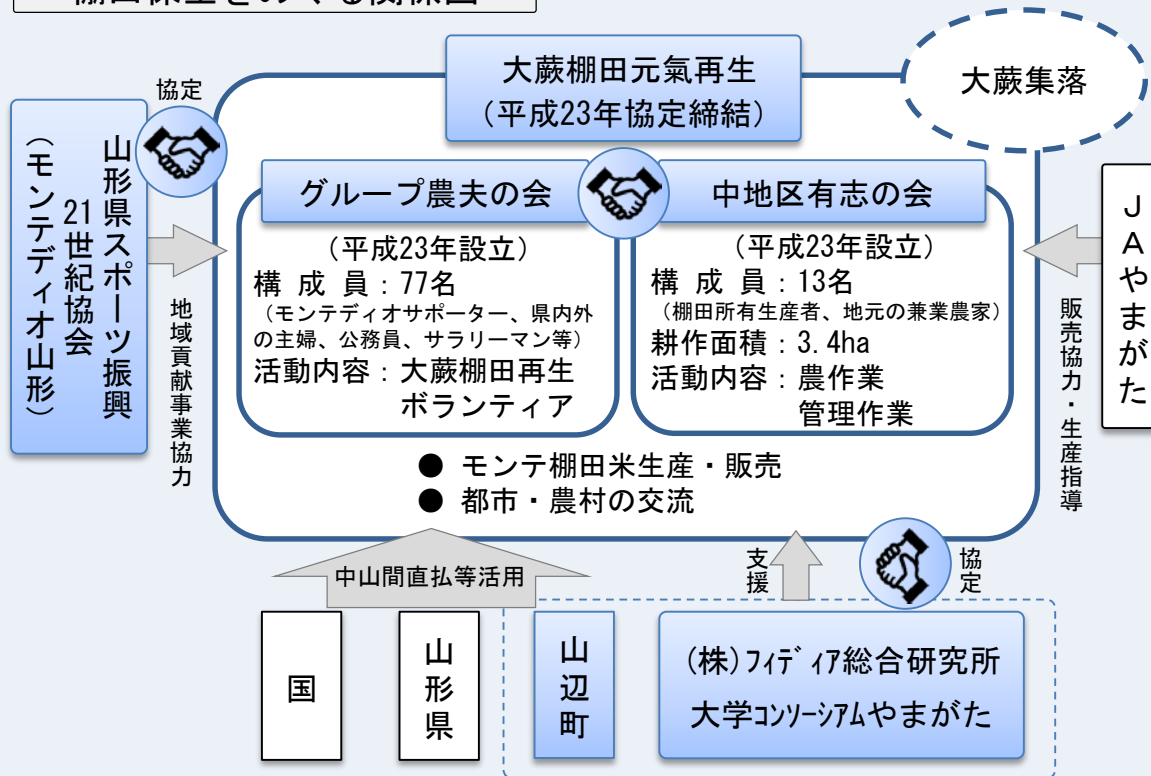
やまのべまち おおわらび

- 所在地：山形県東村山郡山辺町大蕨
(山形駅から車で30分)
- 枚数：約80枚
- 耕作面積：約13ha
- 耕作率：約91%
- 標高範囲：350～410m
- 平均勾配：1/7
- 法面の構造：土羽
- 開発起源：寛永13年（1636年）
- 水源：湧水
- 団体：中地区有志の会、グループ農夫の会
- 選定：日本棚田百選(H11)、山形棚田20選(H19)

地区の特徴、取組効果

- 大蕨棚田は町を代表する景観のひとつだが、担い手の高齢化等で一時は耕作率3割となり、伝統の杭掛け風景が失われつつあった。
- そこで、棚田の元気再生に賛同する5つの組織（下図青色）が協定を結び、棚田のてっぺんまでの再生を目指して取組を始めた。
- 各種取組や、プロサッカーチーム「モンテディオ山形」等の支援により、作付け面積を年々拡大するとともに、イベント開催時の参加者との交流も活発になってきている。

棚田保全をめぐる関係図



(上) 山形県大蕨棚田米とJリーグのモンテ棚田米の2種類を販売。アルケッツチャーノ奥田シェフのおいしい炊き方レシピ付き。

(下) 大蕨棚田再生事業の「棚田でダンス・大地の音が聴こえるかい」の一場面。年間を通して、このようなイベントを開催し交流を深めている。

キーワード

地域外との連携

企業CSR

棚田米販売

都市農村交流

クラブファン

ボランティア

【事例】地域外のアイデアとプロサッカーチームの協力を得て棚田再生を目指す

中山間直接支払交付金導入(H12)
町単独の杭掛け補助導入(H12)

H12から導入したオーナー制度は、受入れ側の疲弊、不採算等により、5年で断念

棚田の荒廃が新聞に掲載(H22)

きっかけ

オーナー制度を導入し再生を試みたが取組が途絶え、美しい景観が失われつつあった



伝統の杭掛け

☆非農家住民の行動がカギ

地元生産者だけでの棚田再生は困難と憂慮した地域内外の非農家住民らが、新たな組織による新たな仕組み作りで協力。

☆地域外（プロサッカーチーム）の協力がカギ

モンテディオ山形の協力で、地域や棚田に所縁のないサッカーファンも取り込み、知名度アップ。

Step 1 (H23)

中地区有志の会設立 グループ農夫の会設立

- 事業主体は、地元農家の「有志の会」とボランティア団体の「農夫の会」。「有志の会」は生産管理及び農業体験指導、「農夫の会」は事務局とマネジメント（生産支援、販売、交流企画等）を担う。
- 事業運営費は「農夫の会」会費と棚田米販売代金を原資とする。

Step 2 (H23～)

棚田再生に賛同する組織とコラボし、地域外との交流による地域の活性化

- 地域密着型のプロサッカーチーム「モンテディオ山形」、当時のやまがた6次産業推進事務局「(株)フィディア総合研究所」、「山辺町」を交え、棚田の保全を通じた農業の再生、環境の維持、地域の振興を目的とする5者協定を締結
- 協働の力で棚田再生スタート。田植え・稲刈り・杭掛けイベントや雪中棚田サッカー大会を開催し、大蔵棚田米・モンテ棚田米の販売開始。

中山間直接支払交付金を活用し、機械（病害虫防除の機材、乾燥・調整施設）や農作業を共同化



モンテディオ山形の選手、スタッフ、サポーター等が参加する大蔵棚田田植えイベント

☆相互扶助の取組がカギ

農家だけでなく、様々な組織の協働で、得意不得意を補いながら地域に人を呼ぶイベントや販売に取り組む。

Step 3 (H24～)

イベント追加

- 棚田の米粉教室・じゃがいも収穫体験・棚田収穫祭を開催

Step 4 (H26～)

イベント追加

- 杭掛けの棚田を舞台に「棚田でダンス・大地の音が聴こえるかい」開催

Step 6 (H28～)

イベント追加

- OWS参加者の発案で「棚田でダンス」と山形交響楽団とのコラボ、ワラビ採り体験等の新たな企画を開始

多面的機能支払交付金導入(H29)

Step 5 (H26)

ワークショップ開催

- 棚田の保全と次世代への継承を考える話し合い（WS）を、有志の会・農夫の会・町のメンバーで開催

いま (H29)

- クラウドファンディングにより苗代等を調達
- 棚田再生は、0.4ha(H23)→2.25ha(H28)、棚田米販売量は、1.7t(H23)→7.7t(H28)に拡大
- イベント参加者も少しずつ増加（年間550人参加）

今後の展望

将来に向けて

- ☑ 棚田のてっぺんまでの再生を目指す
- ☑ 棚田の文化的景観を次世代に継承



○ 都市住民ボランティアとの協力・協働によりスタートした震災復興と集落の存続を目指した活動が、地域おこし協力隊等の活用を通じて、自発的な地域づくり団体へと発展した。NPO法人では若者を雇用し、米の直販や移住定住に向けた支援に取り組み、農業の振興と地域の後継者づくりを推進している。

基本情報

- 所在地：新潟県十日町市池谷・入山
(JR十日町駅から車で30分)
- 枚数：156枚
- 耕作面積：約16.5ha
- 耕作率：約90%
- 標高範囲：200～300m
- 平均勾配：1／13
- 法面の構造：土羽
- 開発起源：江戸時代以前
- 水源：湧水
- 保全団体：NPO法人地域おこし
(前身は十日町市地域おこし実行委員会)
- 棚田オーナー制：H30から開始
- 選定：地域づくり総務大臣表彰 (H23)



地区の特徴、取組効果

- 1960年に37世帯211人いた池谷集落は、2000年代には僅か8世帯に。新潟県中越大地震（2004年10月）により、さらに6世帯13人まで減少し、集落存続の危機に。
- 災害ボランティアの受入れをきっかけに「十日町市地域おこし実行委員会」を設立。都市部との交流事業や移住促進事業などを積極的に行うことで、11世帯25人（うち、子供6人）に増加し、「奇跡の集落」と呼ばれる。
- 集落で生産した魚沼産コシヒカリを「山清水米」というブランド米として販売。現在は、若手移住者による棚田保全活動も加わり、約22.5t（平成27年）を出荷。

キーワード

棚田米販売

地域おこし協力隊

ボランティア

移住促進

ソシヤル

クラファン

オーナー制度

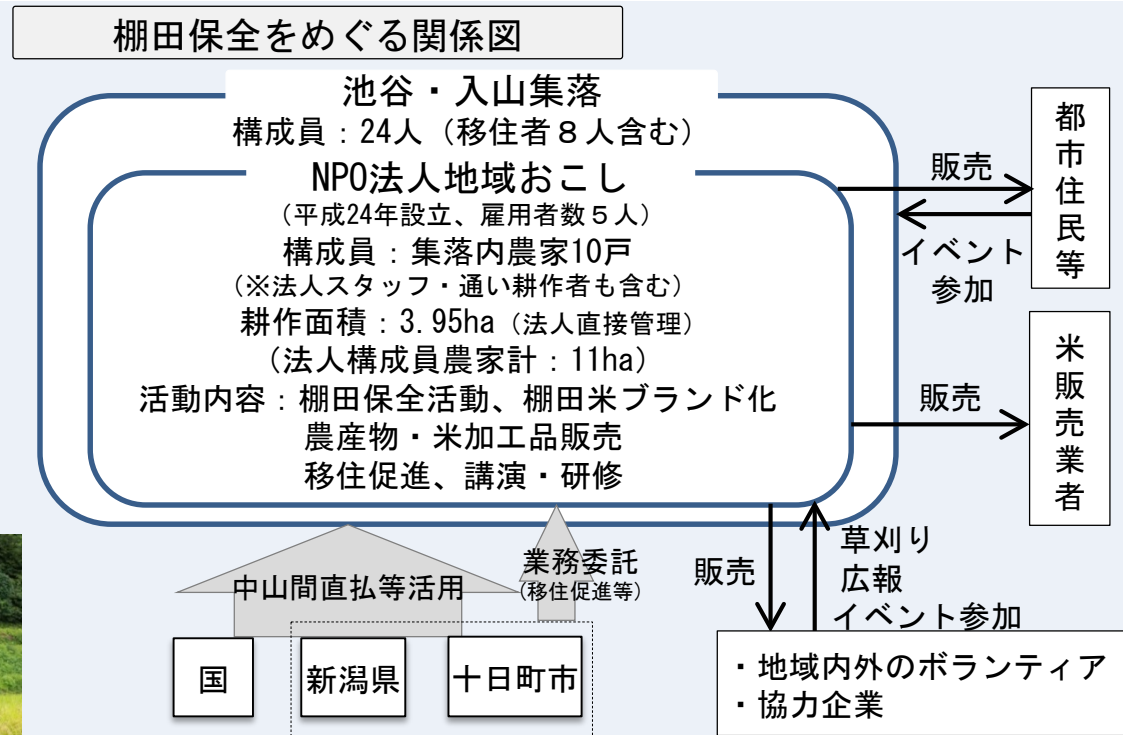
6次産業化

都市農村交流

地域おこし

都市住民等

米販売業者



【事例】震災からの復興～集落の存続に向けた、米の直販と移住定住への取組

平成16年10月に発生した中越大震災の被災を受け、廃村の危機にあった。

☆ 集落の「寛容さ」がカギ

よその人を嫌がない気質があり、試しに受け入れてみたところ、交流を通じて村の宝が見直され、集落の空気が変わる。

☆ 地域おこしのイメージの共有がカギ

外部コンサルの協力で「集落の存続」という目標とそれに必要な「後継者が暮らせる環境」を整えるという方針を決定。

中越大震災復興基金を活用



雪かき道場

きっかけ

NPO法人JENの除雪ボランティアを受け入れる (H17)

改修には支援者寄付金のほか、中越大震災復興基金・中山間地域等直接支払交付金を活用

Step 1 (H17～)

集落の存続に向けたベースづくり

- ボランティア受入団体として「十日町市地域おこし実行委員会」(全集落住民を構成員とする任意団体)を発足
- ボランティアの受入拠点施設とするため旧池谷分校を改修。集会所も改修。
- 地域づくり団体へと進化し、「集落の存続」を住民共有の目標に。

Step 2 (H18～)

棚田米の直販開始

- 集会所に精米プラントを導入し精米～梱包作業を効率化
- ブランド米「山清水米」としてパッケージを統一
- イベント参加・旅館等への営業・ネット販売で販路を拡大し、受注管理も簡素化

Step 3 (H20～)

体験交流イベント開始

- 雪かき道場から始まり、稲作体験、田舎暮らし体験、山菜採り、空き家改築ワークショップ、ブナ林でのヨガ体験、収穫祭等
- 全季節に訪れたいイベントを開催

後継者受入のため空き家を改築(後に協力隊A氏が定住)

農業研修生の受け入れ



稲作体験イベント



後継者育成住宅めぶき



精米プラントで作業する集落の皆さん

☆ 集落の求める人材の確保がカギ

ブログでの募集など住民自ら隊員候補者探しにこだわる。

☆ 集落での雇用がカギ

仕事・収入をつくり、集落への定住につなげる。

Step 4 (H22～)

地域おこし協力隊の受入

- 任期後も集落に定住し活動することを条件に募集
- イベント参加経験のあるA氏がコンサルを退職し、協力隊として家族と移住(現NPO法人事務局長)

自立によりJENの支援が終了

女性2人が池谷分校に居住し広報等を担当。手当は月5万。

高齢営農者が引退し、残る営農者も棚田維持に危機感

採用前に地域おこし体験を一定期間実施

NPO法人が稲作開始。耕作放棄地の受け皿に。(H26～)

中山間直払協定で位置付け

越後木づかい事業助成金・支援者寄付金を活用

池谷分校ではプライバシー確保できない

移住促進事業を市から受託開始(H25)

将来に向けて

- ☑ 後継者と耕作面積の増加
- ☑ ライスセンターの建設
- ☑ 棚田オーナー制度の導入(体験・飯米確保型、H30～)
- ☑ 過疎の成功モデルとなり、日本や世界を元気に!

今後の展望

いま (H29)

- 移住者8人
- 地域おこし協力隊現役3人
- NPO法人の事業収益2,400万
- 棚田米直販22.5t(H18:2t)
- 農家民宿2軒

Step 6 (H25～)

後継者育成住宅の建設

- 後継者育成住宅「めぶき」の建設
- ワークショップも実施し、資金集めにはクラウドファンディングを活用
- 現在3人居住

レトルトのおかゆを商品開発し、委託加工販売開始(H25)

Step 5 (H23～)

NPO法人設立(H24)

- 農村六起ビジネスプランコンペで得た起業支援金と事業計画をもとに、任意団体から法人化
- 職員を正規雇用し、後継者を受け入れる環境を整備
- 農産物直販・体験交流・地域おこしコンサル・研修等実施

4 白米千枚田



キーワード
地域との連携
都市農村交流
オーナー制度
ボランティア
企業CSR

○ ボランティアと行政の支援を受け、近隣地区組織がオーナーを指導することで景観を保全している。

基本情報

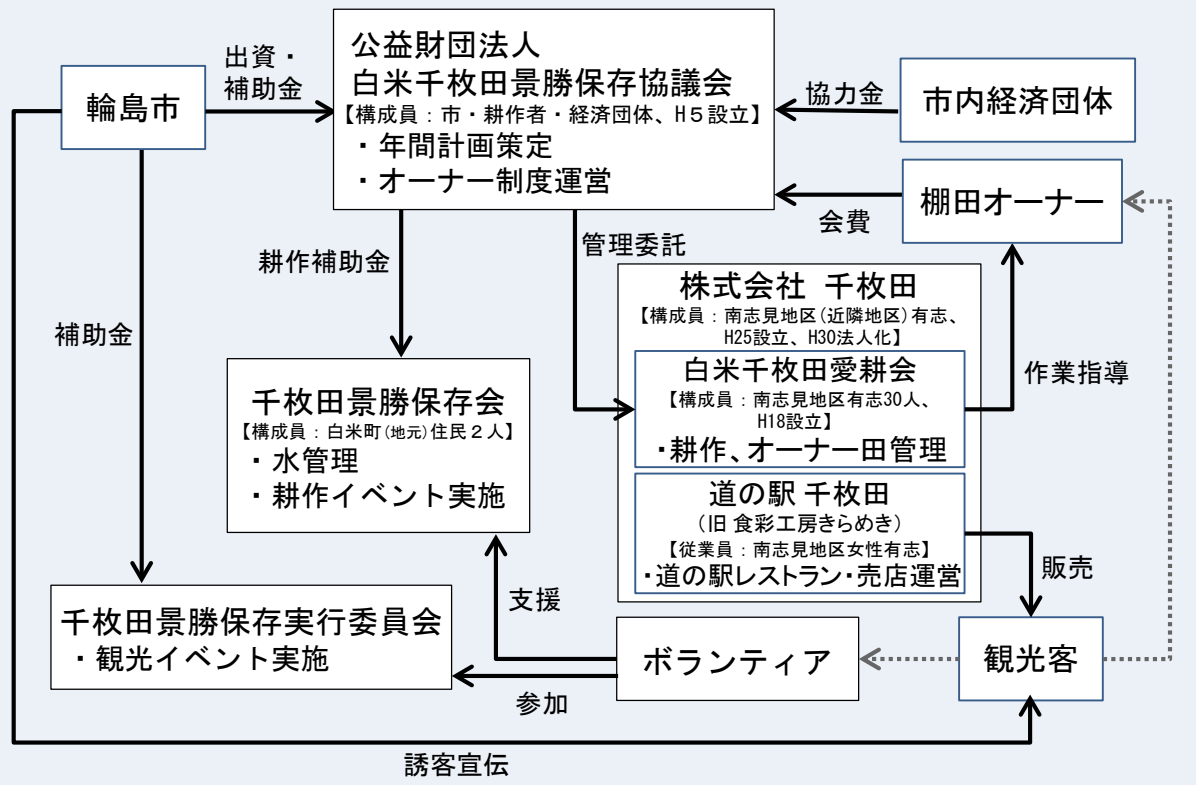
- 所在地：石川県輪島市白米町（輪島市街から車で15分）
- 枚数：1,004枚（畑を含む）
- 耕作面積：約4ha（田1.8ha+畦2.2ha）
- 耕作率：約98%
- 標高範囲：4m～60m
- 平均勾配：1/4
- 法面の構造：土羽
- 開発起源：16世紀以前
- 水源：野田川
- 保全団体：（公財）白米千枚田景勝保存協議会、千枚田景勝保存会、白米千枚田愛耕会
- 棚田オーナー制：165組（H19～）
- 選定：棚田百選(H11)、国指定文化財名勝(H13)、世界農業遺産(H23)



地区の特徴、取組効果

- 地元農家の高齢化・後継者不足により営農維持が困難となった田の再生活動が、ボランティアや近隣地区（南志見地区）の住民により徐々に拡大。
- オーナー制度や各種イベントを通じて交流人口を増やし、現在は世界農業遺産に認定された能登の里山里海を代表する景観として毎年50万人以上の観光客が棚田を訪れるまでになった。耕作イベントや隣接する道の駅での営業を通じて棚田が地域活性化の拠点となっており、営農活動が景観保全に果たす役割とその重要性を伝えている。

棚田保全をめぐる関係図



【事例】農家の人手不足はボランティアとオーナーでカバーする



採算性の低い棚田での所得を平地並みまで引き上げ、耕作意欲の向上を狙った。

Step 1 (S45~)
耕作補助金の交付
 ○ 石川県と輪島市が景観維持の目的で地元農家組織（現千枚田景勝保存会）に耕作補助金を交付開始

きっかけ
 農家の後継者不足が深刻化し、景勝地としての存続が危ぶまれた

S57、修学旅行の一環で愛知県高校生450人が草刈りボランティア開始。次第に他県高校の生徒にも派生。

☆ 地元市民の協力がカギ
 高校生がボランティアで作業していることを知り、市民感情が盛り上がる。

Step 2 (H4~)
ボランティアによる耕作支援の開始
 ○ 連合石川による耕作ボランティア「千枚田ファミリー」が組織される。
 ○ これをきっかけに市役所、農協、会社等様々な団体がボランティアに参加
 ○ 600枚に減少した田が830枚に回復

☆ 組織化がカギ
 役員には地元農家やボランティア団体の代表等が就き、ここで決まった年間計画を基に効率良く作業を行うようになった。

Step 3 (H5)
財団法人千枚田景勝保存基金の設立
 ○ 県、市、地元経済界の出資により基金を設立し、運用益を耕作補助金に充てる体制を確立
 ※ H25から現協議会に移行

経済的支援だけでは後継者不足を解消するに至らず、耕作放棄は4割まで進行。

棚田百選 (H11)
 国の文化財名勝 (H13)
 営農者減少



輪島・白米千枚田あぜのきらめき
 冬場の誘客の目玉として平成23年から始まったイルミネーションイベント。能登半島地震からの復興をPRするために開催していたあぜの万燈が観光客に好評だったことからろうそくをLEDに変えて農閑期を通じてのイベントに発展させた。その効果は大きく、冬季の夜間は0だった入り込みが初年度3万人、H28年度で10.3万人まで増加し、市内及び近隣地域の宿泊率向上にも寄与している。



道の駅千枚田ポケットパーク（棚田米・おにぎりも販売）
 千枚田に隣接する道の駅で、世界農業遺産認定で急増した来場者に対応すべくH25に拡大大リニューアルした。この際に地元産品の直売所や地元産品を提供するレストランを新設し、地元住民が運営を担当している。H28には58万人が訪れ、約1億円を売り上げたが、そのうち一部は千枚田の保全のために寄附されている。

☆ オーナー確保の工夫がカギ
 類似の取組との差別化を図るため、作業にノルマを設けず、ライトな感覚で気軽に参加できる制度に。モットーは「10人のプロより100人の素人」。
 美しい農村再生支援事業交付金を活用しWEBによる情報発信を推進 (H26)



☆ 組織の新陳代謝がカギ
 毎年新たな定年退職者が参加することで、年に2・3人メンバーが入れ替わる組織に。

Step 4 (H15)
保存管理計画の策定
 ○ 国の文化財指定を受け、基金を有効活用するため、有識者会議による検討を経て、管理計画を策定
 ○ オーナー制検討開始

将来に向けて

- ☑ 後継者不足への対応
- ☑ オーナー制度の拡大
- ☑ 移住者に対する就農支援の検討

今後の展望

いま (H29)

- 能登の重要な観光資源に成長
- 田植え・稲刈り・結婚式・あぜのきらめき等イベントを通じ、景観保全には耕作維持が不可欠であることを訴えている

H23、あぜのきらめき（農閑期イルミネーション）開始

世界農業遺産認定 (H23)

H25、道の駅改築に伴い、近隣地区住民への運営委託開始。同地区の女性がレストランや売店で野菜を販売。

基金運用益、市の補助金、地元経済団体の協力を活用し、オーナー制度の収益を棚田保全に活用。

Step 6 (H19~)
オーナー制度開始
 ○ 全国各地から多くの賛同者が集結。特に関東地方の方が多数来訪。交流人口の拡大に寄与。
 ○ 57組 (H19) → 165組 (H29)

Step 5 (H18)
白米千枚田愛耕会の設立
 ○ 近隣地区の退職者達により組織し、オーナー田や休耕田の管理を担う。これによりオーナー制度の通年管理体制が整う。

オーナーを指導する人材がいなかった。
 何とかしなければとの想いで地元農協・市役所OB等が立ち上がる。



キーワード
 地域内
 体制整備
 オーナー制度
 都市農村交流
 企業CSR

○ 都市近郊の地の利を活かし、都市住民を後継者に見据えた「次世代型オーナー制度」を実施している。

基本情報

ちちぶくん よこぜまち

- 所在地：埼玉県秩父郡横瀬町大字横瀬寺坂
- 枚数：約250枚 (横瀬駅から車で5分)
- 耕作面積：約5.2ha (田4ha)
- 耕作率：約100%
- 標高範囲：230~270m
- 平均勾配：1/10
- 法面の構造：土羽、石積み
- 開発起源：鎌倉時代
- 水源：曾沢川
- 保全団体：寺坂棚田保存会
- 棚田オーナー制：25人 (H20~)



寺坂棚田学校

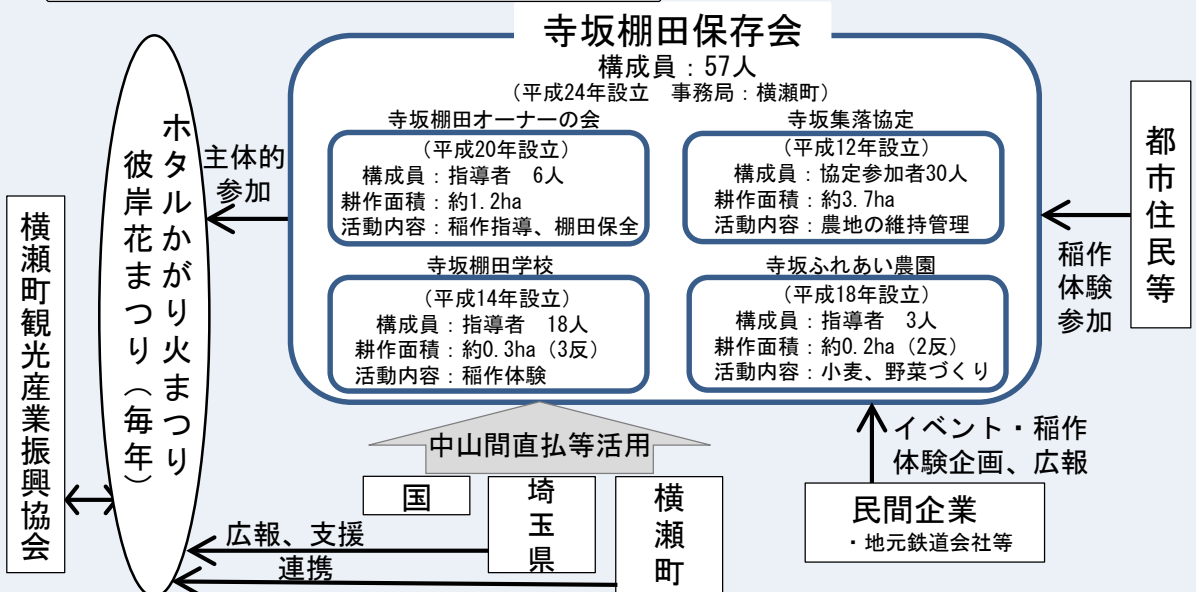


ホテルかがり火まつり

地区の特徴、取組効果

- 寺坂棚田は、都心から電車で1時間半程度の場所に位置する横瀬町にある秩父のシンボル武甲山を正面に望み、埼玉県内最大級の規模を誇る。
- S50頃に50戸いた耕作者はH10頃には4戸にまで減少したが、復田に向けて所有者らが先生となり学校形式で都市住民に稲作を体験してもらう「寺坂棚田学校」をH14に開校したところ人気となり、毎年新生を迎え安定的に継続しているほか、H20には、米作りを身につけた学校卒業生が独り立ちして各自の専用田で耕作する「オーナーの会」にも発展し、復田は完了した。棚田学校、オーナートライアルコース、オーナーという3段階でステップアップでき、オーナーは育苗から脱穀や日常の水管理に至るまで全てを行い年30日以上棚田を訪れるため、「次世代型オーナー制度」とも呼ばれている。
- 地域イベントとしてホテルかがり火まつりや彼岸花まつりを開催し、H28には9,000人の来訪者を迎え、棚田で収穫した餅、赤飯、農産物を販売した。

寺坂棚田の保全をめぐる関係図



【事例】都市住民の稲作体験から独り立ちまでサポートする「次世代型オーナー制度」の成功

県の農村生活体験交流事業を活用

きっかけ

H13、県の提案で都市住民を集めた「古代米作り体験」を実施

☆ 地元農家の決意がカギ

荒れ果てた農地を、昔の美しい棚田の風景に復活させたいとの思いから、集落で話し合いを重ね、学校という形式をとることに。

農地の保全を継続していくために、担い手を増やす新たな取組が必要。

☆ 宮農技術を持ったオーナーの育成がカギ

寺坂棚田学校で米作りのノウハウを学び、独り立ちしたいとの意欲を持った生徒の要望で開始。

Step 1 (H14～)

寺坂棚田学校を開校

- 都市住民とともに復田を目指すことに。
- 有機無農薬、手植え、はぜ掛け等の12行程で棚田米を栽培する学校を開校。初年度は地元の農業者19人が先生、市内外在住の32人が生徒。
- 都市住民との交流の場となり、指導者として参加した地元農家の方々の生きがいとなっていく。

Step 2 (H20～)

寺坂棚田オーナー制度を開設

- 寺坂棚田学校の卒業生が中心となり、自らの手で一から米作りを行うため、学校隣接の土地を実践田として復田し、オーナーとして年間契約での耕作を開始。他の体験型オーナー制度と異なり、オーナーは年間30日以上来訪し、水路の清掃や草刈り等も実施する。収穫した米は全て持ち帰る。
- 米作りに必要な農機具は一式揃えられており、燃料費程度の使用料を支払えば自由に使用できる。

Step 3 (H20～)

農機具等の購入

- 交付金の30%は地権者に渡し、残りの70%は集落で留保し、農地等の共同維持管理費や農機具等の購入費に活用。

☆ 制度の活用がカギ

地域で交付金の活用方法について話し合う。

中山間地域等直接支払制度を活用し、農機具等を購入 (H20～)

☆ 行政の協力がカギ

町及び産業振興協会等と連携し、イベントを開催。

鉄道会社との連携により広報活動を拡大 (H24)



一人でも多くの生徒がオーナーとして独り立ちできるよう、指導を開始。

Step 6 (H29～)

オーナーの育成

- オーナーへの架け橋となるオーナーツアーコースを新設。生徒はオーナーに必要な全工程の稲作技術や寺坂棚田地区の慣習を共同作業田での指導と個人専用田での自立作業により習得。

Step 5 (H24～)

横瀬町との連携

- H19から学校メンバーが自主的に始めた「ホテルかがり火まつり」、H13頃から植栽を始め毎年150万球の花が咲き誇る「彼岸花まつり」について、横瀬町との連携で開催規模を拡大。

Step 4 (H24)

寺坂棚田保存会を結成

- より一層の関係強化のため、寺坂集落協定、寺坂棚田学校、寺坂棚田オーナーの会、寺坂ふれあい農園の4団体を一つに統合し保存会を結成。

棚田に関わる団体の連携が軟弱。

将来に向けて

- ☑ 保存会の人員確保と後継者の育成。
- ☑ オーナートライアルコースにより多くのオーナーを輩出。

今後の展望

いま (H29)

- オーナー25人。棚田学校生徒70人以上。
- イベントの来場者数は年々増加。
- 数多くのメディアに取り上げられ観光スポットとなる。



キーワード

地域外の連携

オーナー制度
都市農村交流

教育

6次産業化

農泊

企業CSR

○ 模範的なオーナー制度と体験学習で都市農村交流を通じた地域活性化のモデル事例となっている。

基本情報

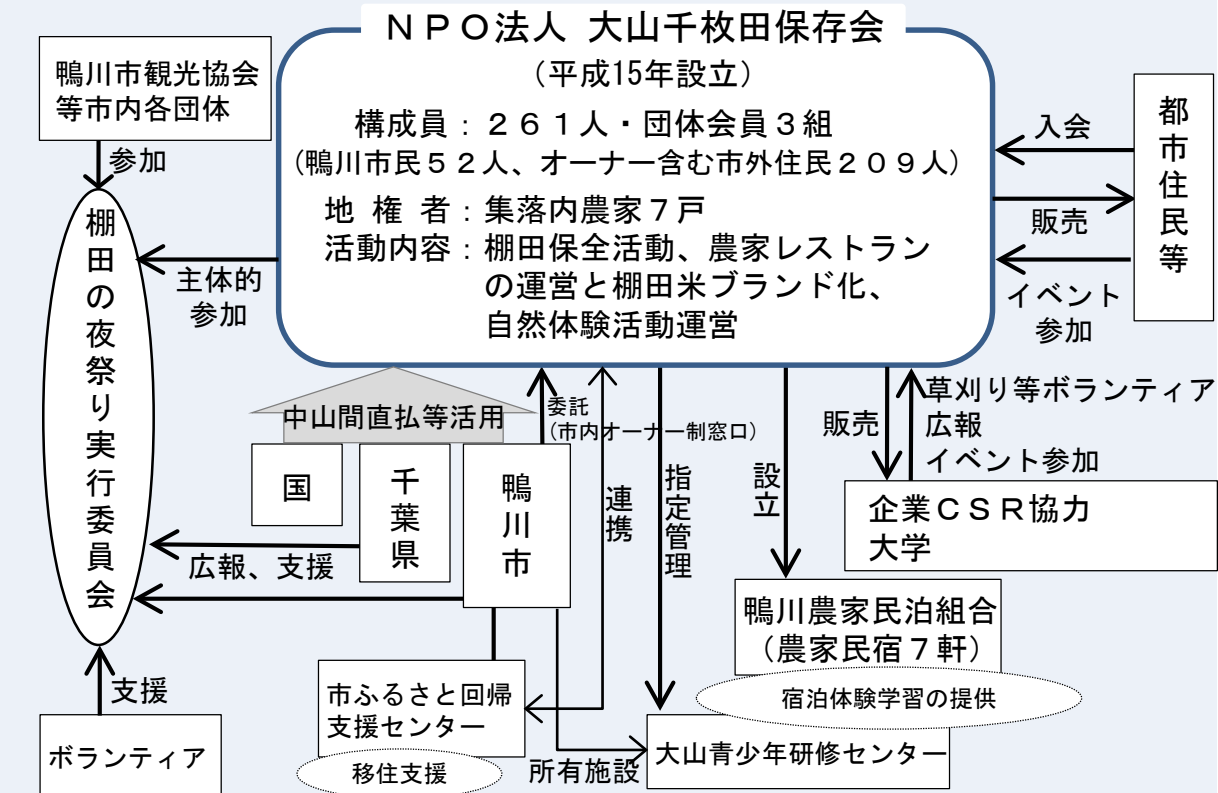
- 所在地：千葉県鴨川市釜沼かもがわし かまぬま
- 枚数：375枚 (JR安房鴨川駅から車で30分)
- 耕作面積：約3.2ha (棚田オーナー制2.3ha)
- 耕作率：約99%
- 標高：200m
- 平均勾配：1/5
- 法面の構造：土羽
- 開発起源：江戸時代
- 水源：天水
- 保全団体：NPO法人 大山千枚田保存会
- 棚田オーナー制：154組 (H10～)
- 選定：日本の棚田百選(H11)、千葉県名勝(H14)、オーライ！ニッポン(H15)、重要里地里山(H25)



地区の特徴、取組効果

- 江戸幕府の直轄牧であった嶺岡牧跡につながる棚田は、都心から2時間弱で行ける「東京から一番近い棚田」として知られ、全国でも唯一天水だけで水源を賄っている。来訪者数は年間3万人を超え、鴨川市の重要な観光資源となっている。
- 棚田オーナー制度を中心に、棚田トラスト、大豆畑トラスト、酒づくりオーナー、綿藍トラスト、家づくり体験塾など、農家の知見や地域資源を活用した様々なプログラムを用意。年間5,600人以上の児童・生徒等が体験学習を行っている。

棚田保全をめぐる関係図



鴨川市観光協会
等市内各団体

NPO法人 大山千枚田保存会
(平成15年設立)
構成員：261人・団体会員3組
(鴨川市民52人、オーナー含む市外住民209人)
地権者：集落内農家7戸
活動内容：棚田保全活動、農家レストランの運営と棚田米ブランド化、自然体験活動運営

都市住民等

参加

入会
販売
イベント参加

主体的参加

中山間直払等活用

委託
(市内オーナー制窓口)

販売
草刈り等ボランティア
広報
イベント参加

国
千葉県
鴨川市

連携
指定管理

設立
企業CSR協力
大学

広報、支援

鴨川農家民泊組合
(農家民宿7軒)
宿泊体験学習の提供

ボランティア
支援

市ふるさと回帰
支援センター
移住支援

所有施設
大山青少年研修センター

【事例】 棚田オーナー制度を中心に地域活性化に取り組む

☆ 地域の課題解決意識と行政との連携がカギ

棚田や文化、自然環境を地域資源と据え、地域住民が地域づくりに対して課題意識を持ち、行政が活動の出発をサポートをすることが大事



きっかけ

H7、地域の衰退に危機感を募らせた住民が、農村の活性化を目指す事業の導入を市に要請し採択

Step 1 (H9)
大山千枚田保存会 発足
 ○ 検討を重ね、大山千枚田を核とした地域振興を図ることを決定。
 ○ 都市住民の参加を促し、地権者、地域住民、都市住民の77人で発足。景観整備(復田)を開始。

事務能力に長けた主婦、ITに強いITターン者等地域住民の活躍で棚田の知名度が高まる。

Step 2 (H10~)
棚田オーナー制
 ○ 先進事例に学びながら検討を開始。
 ○ 通年の農作業体験を試行。地域の意識が変わり始め、H12からオーナー39組で本格導入。H13は112組に。

マスコミ関係者、営業マン等多様な経歴のオーナーが来訪し、多くが保存会にも登録。

中山間地域等直接支払交付金(H12~)

棚田百選(H11)

鴨川で第8回棚田サミット開催(H14)

多くが都市住民の意見で開設。

Step 3 (H15~)
体験学習
 ○ 自然観察、里山ウォーキング、郷土料理づくり、わら細工等実施。酒づくりオーナー(H16~)、藍染め(H17~)、家づくり体験塾(H18~)等、取組拡大。

荒廃した竹林の整備と再利用を、観光地としての知名度アップと各団体との連携強化につなげる。

Step 4 (H15~)
NPO法人化
 ○ 法人化により指定管理の受託や補助金の取得が可能となり、広範な事業展開に寄与。
 ○ 新たに移住したオーナーが役員を担うほか、後に専任職員も雇用。

市内他地区もオーナー制度開始。事務局となり、募集から運営まで関わる。(H16~)

製菓会社の労働支援活動(H18~)

Step 5 (H18~)

棚田のライトアップ

○ 観光業者、旅館業者、住民、行政とで実行委員会を設立し、竹とバイオディーゼルを用いて、環境と観光の両立を目指したライトアップイベントを開始。高校生が松明設置。

○ ロングラン開催に向けてLEDライト導入(H25~)

☆ ニーズの把握がカギ

小学校を中心とする体験宿泊学習と二地域居住のニーズの高まりを捉え、周辺環境調査や体制整備を実施
 「新たな公」事業を活用(H20~21)



都市農村共生・対流総合対策交付金を活用(H27)

Step 7 (H28~)

農家レストランの営業開始
 ○ 古民家を再生し、酪農発祥地という地域の歴史と食文化を伝えるためのレストラン開始。

研修生の受け入れ、体験プログラム開発(H27~)

農山漁村振興交付金を活用(H27~29)

環境財団の助成を受けビオトープ造成(H24)

説明会やマニュアル作成により農家民宿は7軒に拡大。国内外から宿泊学習の受入れを実施。(H23~)

受け入れキャバを増やしたいが、多くの農家が様子見。

Step 6 (H21~)

鴨川農家民泊準備会設立

○ 市のふるさと回帰支援センターと二地域居住を推進する中で、宿泊場所のニーズを把握。二地域居住の窓口を増やす目的で4軒の農家で農家民泊準備会を設立。農家民宿の営業許可を取得し、営業開始。
 ○ H22、農家民泊組合に発展。

将来に向けて

- ☑ 農と福祉と教育の連携
- ☑ 担い手の育成
- ☑ 農家民宿の拡充

今後の展望

いま (H29)
 ○ 棚田オーナー制度の拡充(154組)
 ○ 体験学習の受入れの充実(学校の体験学習等5664名)
 ○ 農家レストランの充実(売上げ860万円)



キーワード
 地域内
 体制整備
 オーナー制度
 都市農村交流
 企業CSR
 6次産業化
 棚田米販売

○法人組織化した棚田保存会が中心となり、行政との連携を通じて地域活性化に取り組む。

基本情報

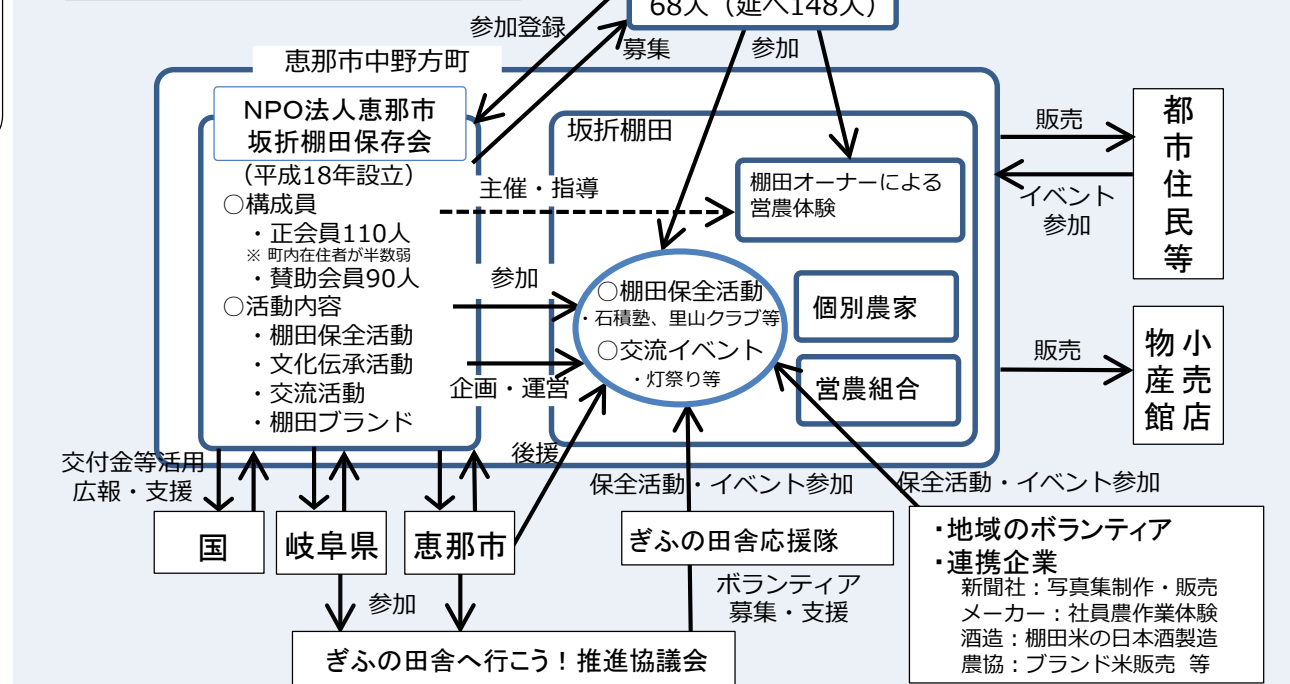
- 所在地：岐阜県恵那市中野方町 (JR中央線 恵那駅から車で30分)
- 枚数：約360枚
- 耕作面積：約10ha
- 耕作率：約73%
- 標高範囲：400~600m
- 平均勾配：1/5 (1/4~1/7)
- 法面の構造：土羽、石積み
- 開発起源：江戸時代 (約400年前)
- 水源：湧水、河川
- 保全団体：NPO法人恵那市坂折棚田保存会
- 棚田オーナー制：H18開始後、延べ148人
- 選定：日本の棚田百選(H11)、ぎふの棚田21選(H20)



地区の特徴、取組効果

- 今から約400年前の江戸時代から石積み棚田が築かれ始め、明治初期に現在の形状となった。多くが石積の棚田であり、中には城塞の石積構築に活躍した黒鍬と呼ばれる土木技術の職人集団によって積まれた石積みもある。地下水の多い地区であり、鳥居型に石を積み、暗渠として湧水を巧みに利用するなど先人の知恵がうかがわれる。
- 棚田オーナー制
 - ・オーナー側のニーズに合わせられるよう4区分に分けて運営。(通常オーナー、本格オーナー、グループオーナー、御一人様オーナー)
- 里山クラブ
 - ・棚田保全及び農山村体験等の13活動に年間を通して自由参加可能。
- 石積塾
 - ・棚田保全の要である石積み技術を伝承するために毎年開催。
 - ・塾長が認めた参加者は「石積み技工士」として独自認証。
- 都市農村交流施設「なごみの家」、棚田カフェ「ぺんぺん草」を保存会で運営。地元女性雇用。

棚田保全をめぐる関係図



【事例】現状分析と地域の意思統一を経て、オーナー制度を核とした保全活動を展開

☆現状を知ることがカギ
 ~行政と学識経験者による調査・構想策定が契機~

- ・ほ場整備は地形の改変を伴うので、土地利用計画の策定に当たっては長期的な見通しをしっかりと立てることが重要。
- ・学識経験者のアドバイスを全国的な事例を参考に検討するため、早稲田大学の中島教授を委員長に選任。



☆地域の意思統一がカギ

- ・棚田サミットを通じて、地域の保全気運の醸成と全国の棚田関係者との交流を経た情報収集が可能となり、棚田を積極的に活用する転機となる。
- ・一過性ではなく取組を発展させるためには、地域の意思統一と地域をまとめるリーダーが重要。

恵那市教育委員会が京都大学の金田教授の指導を受け、水田の現況と歴史民俗資料の調査を実施。

きっかけ
 ほ場整備事業を実施する際、棚田保全の在り方について、学識経験者による調査を実施 (H9~)



Step1 (H11)
検討会の設置

- メンバーは地元農家・自治会・学識経験者。
- ソフト面も協議。

棚田百選に選定 (H11)

Step2 (H12)
保全構想の策定

- 農家の意向を踏まえて地区を4つにゾーニングし、調和の取れた整備と保全を行う構想を策定。
- 当該構想に基づく各種整備事業を実施。
- 稲刈体験ツアー等開始。

棚田基金を活用

Step3 (H15~)
積極的な取組開始

- 第9回全国棚田サミット開催 (H15)
- 地元有志の会 (後の坂折棚田保存会) が発足 (H15)
- 展望スポットに東屋、トイレ、看板を整備 (H15)
- 棚田コンサートを開始 (H16)
- 民間企業の農業体験を受け入れ開始 (H17)
- 棚田ブランドの開発 [棚田米、日本酒] (H17)

国・県補助金を活用 田園空間整備事業

所有者の意思統一、整備と保全とのバランス、景観との調和が課題

☆地域の協力がカギ
 ・外部からの受入れを行うための準備について、学校、行政、関係農家の協力が重要。

☆来訪者のニーズ把握がカギ
 ・保全活動と観光体験を組み合わせた場合、参加者の満足度向上は最も重要な課題。

都市農村共生・対流総合対策交付金を活用

☆企画力と情報発信・対応力がカギ
 ・組織化を通じて、関心が得られる魅力的な企画、棚田保存にかける想いの外部への発信、適切な段取りと正確な事務対応 (オーナー対応への時間配分等) を実施。

・町ぐるみでオーナーや訪問者の多様なニーズに対応することで、交流を拡充し、棚田保全はもとより、移住や定住を期待する。
 ・棚田保存会そのものを一層足腰の強い組織に発展させる。

- 将来に向けて**
- ☑ オーナーの拡充
 - ☑ 里山クラブの拡充
 - ☑ 農泊の実現
 - ☑ 地元市民や連携企業との関係を拡充

今後の展望

いま (H29)

- オーナー制の拡充 (H27~)
 - ・オーナー側の形態とニーズに対応できるよう、4区分を設けて運営。
 - [通常オーナー、本格オーナー、グループオーナー、御一人様オーナー]
- 里山クラブ (H27~)
 - ・棚田保全活動はもとより、山の手入れや炭焼き等 地区内にある山村の暮らしと文化を包括した体験活動に年間を通して自由に参加できる制度を開始。
 - ・観光栗園との連携開始。
- 「(新)なごみの家」が完成 (H28)
 - ・新たな交流拠点として使用。
 - ・棚田カフェの運営開始。

国・市補助金を活用

Step5 (H24~)
棚田保存活動の拡充

- 農村ツーリズムで交流拡充
- 棚田ウォーキングコース、案内マップ作成、看板設置
- 田の神灯祭りの開始
- フォトコンテスト開催
- 写真カレンダーの作成
- 法人オーナーの登録
- 地域おこし協力隊の受入
- 草刈等の地道な管理活動

棚田基金を活用

中山間直払交付金、多面支払交付金、県交付金を活用

地方創生推進交付金を活用

Step4 (H18~)
保存会設立・活動の基礎確立

- 地元有志の会を組織化し、坂折棚田保存会を設立 (H20:NPO法人化)
 - ・会員数 H18: 80人 ⇒ H29: 200人
- オーナー制の開始
- 石積塾の開始
 - ・棚田保全の要である石積み技術を伝承。
 - ・塾長が認めた参加者に「石積み技工士」を認定。
- 棚田通信の発刊、ホームページ開設
- 棚田の近くに活動拠点を確保。
 - ・空き家となっていた江戸時代から続く旧地主宅の家屋の使用貸借契約を締結。

棚田基金を活用

・空き家利用の先駆事例と自負。
 ※H27まで使用したが、柱が腐食したため解体。
 ⇒H28 同じ場所に「(新)なごみの家」を建設。



○ 地域住民が復田した棚田をオーナー(都市住民)が保全し、行政がサポート。3者連携で取り組む。

基本情報

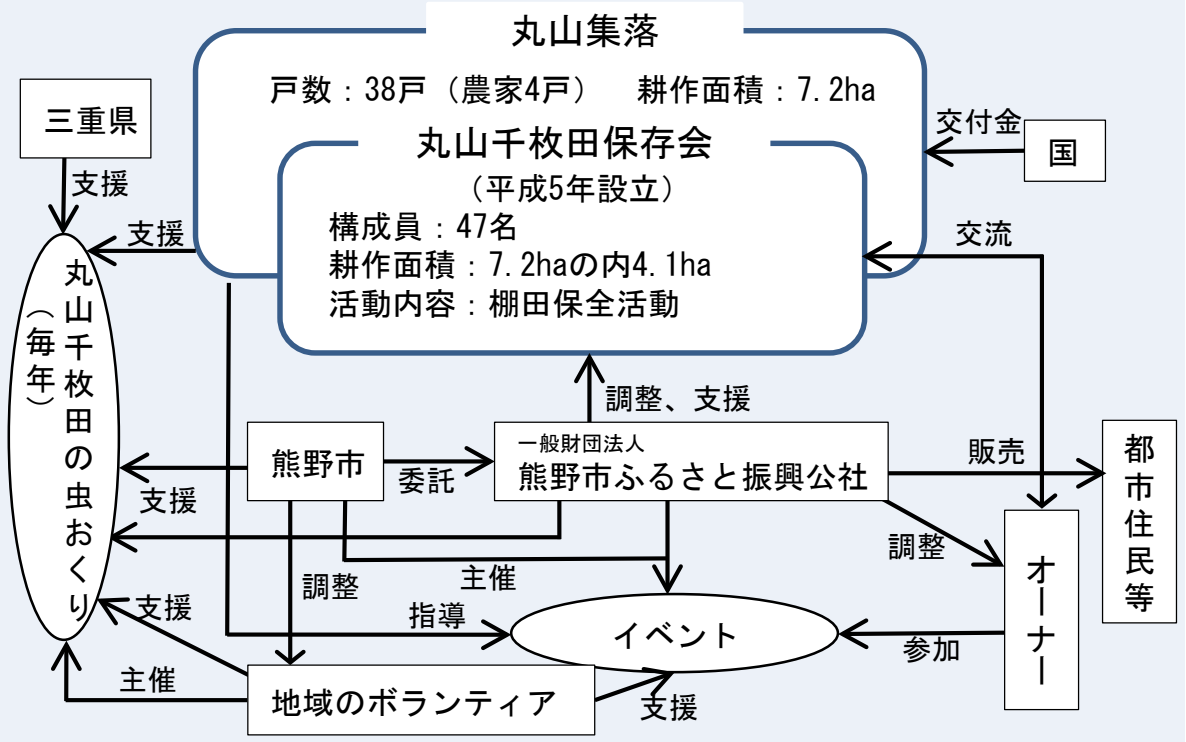
- 所在地：三重県熊野市紀和町丸山くまのし きわちよう まるやま
(熊野市駅から車で35分)
- 枚数：約1,340枚
- 耕作面積：約7.2ha
- 耕作率：約57%
- 標高範囲：90~250m
- 平均勾配：1/5
- 法面の構造：土羽、石積み
- 開発起源：不明
(1601年には2,240枚の田が存在)
- 水源：丸山川
- 保全団体：丸山千枚田保存会
- 棚田オーナー制：133組 (H8~)
- 選定：日本の棚田百選(H11)、立ち上がる農村(H16)、ユネスコプロジェクト未来遺産(H24)



地区の特徴、取組効果

- 高低差160mと急峻な地形に 1,340枚もの小さな田んぼが広がり、一望できる枚数が多いことが特徴。後世に残すためH6には全国初の千枚田条例を制定。
- 地域住民(丸山千枚田保存会等)、行政(ふるさと振興公社等)、外部サポーター(棚田オーナー等)の3者が連携することにより、開かれた地域づくりを実践している。棚田オーナー制度はH8から継続し、県内外から集まる800人前後のオーナーと交流している。
- H16に復活した火と音で害虫を追い払う農耕行事「虫おくり」に毎年1000人前後の観光客が訪れている。

棚田保全をめぐる関係図



キーワード

地域内体制整備

オーナー制度 都市農村交流

6次産業化

棚田米販売

農泊

学生

【事例】地域住民、行政、都市住民の協働により、皆で残そう！10年、100年千枚田

S30以降の過疎化、高齢化により、荒廃地が増。400年前に2,200枚あった棚田は500枚近くまで減少。

☆ 住民の熱い想いと地域の結束がカギ

住民の「何とかしたい」との想いが地域リーダーの熱意とリーダーシップに引き寄せられ結束し、行政の積極的支援と相まって活動活発化。



☆ 受入環境整備がカギ

来訪者の満足度を上げる取組を検討。

山村振興等農林漁業特別対策事業を活用し「千枚田荘」を新築 (H9)

交流センターでの蕎麦打ち体験等実施 (H9~)

きっかけ

棚田を残したい地域住民の想いと、観光資源に活用したい行政の想いが一致

Step 1 (H5~)

棚田復元

- 地元丸山地区全戸を会員とする「丸山千枚田保存会」を結成。町から整備委託費を受け、農家が提供した機械を用いて毎日10人が復元作業に従事。
- 町は「紀和町ふるさと公社」(現在の熊野市ふるさと振興公社)を設立し、復元をバックアップ。公社は保存会会員を雇い、耕作に賃金を支払う。
- H5~8の4年間で810枚を復元。

Step 2 (H6)

条例制定

- 千枚田を後世に残すため全国初の千枚田条例を制定。関係者の責務、保護区域の指定、財政支援等を規定。

復元した棚田を維持するには人手が必要。

Step 3 (H7~)

宿泊施設・展望台を整備

- 休憩所とトイレを新築し、訪れやすい環境を整備。
- 宿泊施設を整備し、遠方のオーナー獲得と長期滞在できる観光集客の増加を図る。
- 山の中腹に展望台を整備し、圧倒的なスケールの眺望で丸山千枚田の魅力をアップ。

Step 4 (H8~)

棚田オーナー制度の開始

- 都市住民との交流を深め「みんなで守り、みんなで残そう」をモットーに開始。
- 田植えの集い、稲刈りの集いなど農作業体験をできるイベントを通年で開催。
- H8は68組でスタート。オーナーは年々増加しH29は133組・752人が参加。

都市住民に丸山千枚田の魅力をPRするチャンス

☆ 伝統行事復活がカギ

一般の観光客を増やすことが保全につながる。

熊野古道世界遺産登録記念事業補助金を活用 (H16)

・保存会、市公社、県の職員による勉強会を開始
・保存会会員を地域外に拡大 (H20~)

Step 7 (H21~)

どぶろく販売

- 千枚田米のブランド力向上のため「なめらかどぶろく」を販売。
- 伝統製法を引き継ぐ杜氏が公社職員として廃校小学校の給食室を改築し、製造。

Step 6 (H16~)

虫おくり復活

- S28に消滅した火と音で害虫を追い払う農耕行事を復活し、棚田に1340本のキャンドルを灯す祭りを開催。
- 毎年1000人前後の観光客が参加。

Step 5 (H11)

支援の多角化

- 来訪できない消費者から棚田の維持管理協力金を募る「丸山千枚田を守る会」を発足。会員には棚田米と機関誌を送付。

棚田百選 (H11)

近年では、体験学習で保存会から指導を受けた地元中学生が、オーナーに農作業を指導



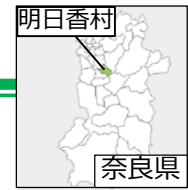
将来に向けて

- ☑ 全国に千枚田ファンを増やしていく
- ☑ 若い世代との交流の場を増やしていく
- ☑ 後継者不足への対応

今後の展望

いま (H29)

- 企業、大学もオーナーに
- 千枚田米6.6トン収穫、どぶろく約500ℓ生産、千枚田荘宿泊者134人 (H28)



キーワード

地域内
体制整備

オーナー制度

都市農村交流

ボランティア

6次産業化

○オーナー制度を先駆的に活用しオーナーを巻き込んだ景観保全活動やイベントを実施している。

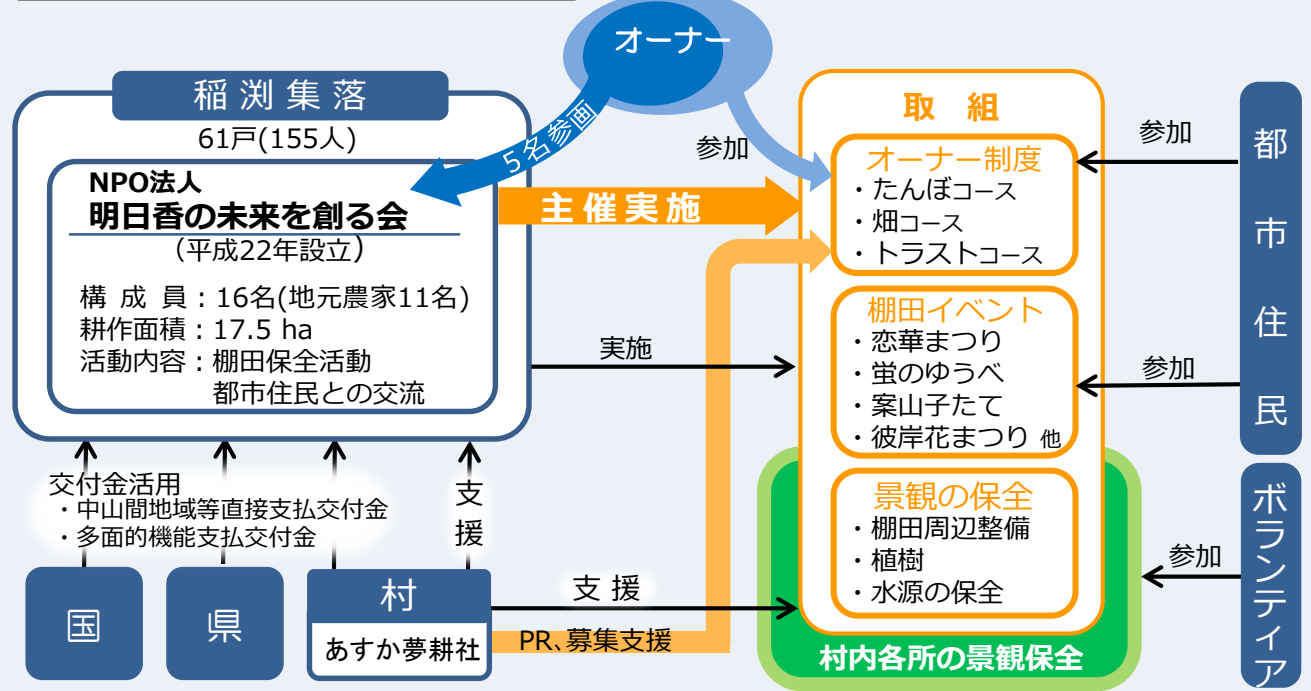
基本情報

- 所在地：奈良県高市郡明日香村稲渚たかいちぐん あすかむら いなぶち
(飛鳥駅から車で約12分)
- 枚数：約500枚
- 耕作面積：17.5ha
- 耕作率：67%
- 標高範囲：140～180m
- 平均勾配：1/7
- 法面の構造：土羽、石積み
- 開発起源：約700～900年前
(平安～室町期)
- 水源：飛鳥川
- 保全団体：NPO法人明日香の未来を創る会
- 棚田オーナー制：62組 (H8～)
- 選定：美しい日本のむら景観百選(H3)、日本の棚田百選(H11)、日本の里100選(H21)、重要文化的景観(H23)

地区の特徴、取組効果

- 飛鳥時代の歴史的・文化的遺産が多く存在する明日香村において、周囲の自然と一体となって当時を偲ばせる稲渚地区の歴史的風土を、住民主導で維持していくとの意識の下、平成8年から棚田オーナー制度を実施。水田以外にも、畑コースやトラストコースに取組を拡大するほか、蓮華まつりや彼岸花まつり、かかしコンテスト等、四季を通じた様々なイベントを開催している。
- オーナー制においては、活動歴の長いオーナーが住民に代わって新規オーナーのインストラクター（指導者）となり、主催組織へ参画しているほか、景観保全においては、水源である飛鳥川周辺や竹林の伐採整備や植樹にボランティアを導入するなど、集落と都市住民とが一体となった活動を繰り広げている。

棚田保全をめぐる関係図



【事例】活動組織をNPO法人化し、集落と都市住民とが共同で棚田を保全

☆ 地域住民の意識がカギ

「古都保存法、明日香法（S55～）による厳しい規制で歴史的風土を守る」のではなく、「住民自らの活動によって風土を維持創出していく」という前向きな意識。

☆ 棚田オーナーの主体的協力がカギ

集落と棚田オーナーとの合同会議により実行委員会を運営し、オーナーが新たなイベント等を企画し地元が協力する体制も形成。

☆ 生産性向上と棚田の景観保全との両立がカギ

これまでの棚田保全の取組を通じて、住民全員が納得した整備を実現。

棚田地域等緊急保全対策（H10）

きっかけ

棚田荒廃への危機感

- ・高齢化による担い手の減少
- ・耕作放棄地の増加

Step 1 (H6)

集落での話し合い

- 歴史的風土を守りつつ地域の農業や集落機能をどのように維持していくか検討
- 景観を重視する観点から棚田を整備
- 先進地視察(京都府旧園部町(レンゲ祭り))を契機に棚田活用意識の芽生え

棚田オーナー制度導入に向けた実行体制の整備等

Step 2 (H8～)

棚田の保全活動等の開始

棚田ルネサンス実行委員会を結成し、棚田に関心を寄せる人々の参画を促進

- 棚田オーナー制度の実現(全国で2番目)
- 様々なイベントの開催
春：レンゲ祭り、夏：蛍の夕べ
秋：彼岸花祭り、かかしコンテスト
- 環境保全型活動の実施

参加者の希望により、畑コース、トラストコースに取組が拡大

H10、(財)明日香村地域振興公社(あすか夢耕社)設立。棚田イベントやオーナー制度のPR、募集を支援。

Step 3 (H10)

景観に配慮した基盤整備等

- 景観に配慮した区画整理や水路改修、道路整備
- 準備休憩施設「憩いの館」設置
- 農機具置場や技術指導の場「棚田ハウス」の設置
- 女性を中心となりテントを利用した直売所「かんなびの里」で農産物販売



棚田オーナー活動

かかしコンテスト



体験イベント

棚田米を使った日本酒(造りオーナー制度実施)



棚田百選に選定(H11)

Step 4 (H14～)

女性食品加工グループ「甘南備の郷」活動

- 赤米、白米、よもぎを組み合わせた「かんなびもち」の開発

☆ 地域住民と都市住民の参画がカギ

外からの力を活用し、棚田を中心とした地域の保全、活性化を図る。

Step 6 (H22)

NPO法人「明日香の未来を創る会」設立 環境保全と地域の自立を促進することが目的

- 棚田オーナーも会員・役職者に含め、稲刈集落・棚田という枠を越えた地域全体の未来のため、棚田景観保全、都市農村交流、環境教育、伝統文化継承を担う

担い手の減少等、稲刈集落内の活動だけでは解決できない

オーナー制度の核であるインストラクターの高齢化が進行

Step 5 (H17～)

農地の保全活動等

- 農道、水利施設の維持管理
- 獣害防止対策として電気柵の設置
- 認定農業者の育成

・集落の景観や郷土文化を再認識
・交流を通じて棚田オーナーがともに地域づくりを担う意識を醸成

将来に向けて

- ☑ インストラクター育成
- ☑ 担い手の育成・確保
- ☑ インバウンドを意識した取組

今後の展望

いま (H29)

- 棚田オーナー制度ピエゾナースコースの新設
- 体験プログラムの実施(田植え、稲刈り、自然観察等)年間参加者80名
- ボランティア(村内の観光スポットの整備)による、棚田保全活動

初心者や女性をターゲットに耕作面積を半分にしたコース

活動歴の長いオーナーが新規オーナーのインストラクターとして活躍

重要文化的景観に選定(H23)



○棚田オーナー制度、交流事業、特産品販売等バランス良く実施し、新規定住者の獲得につなげている。

基本情報

- 所在地：京都府福知山市大江町毛原 (大江山口内宮駅から徒歩で約15分)
- 枚数：約600枚
- 耕作面積：7.5ha
- 耕作率：88%
- 標高範囲：100～200m
- 平均勾配：1/10
- 法面の構造：土羽、石積み
- 開発起源：平安時代以降
- 水源：谷川水
- 保全団体：毛原の棚田保全事業部
- 棚田オーナー制：10組程度 (H10～)
- 選定：日本の棚田百選(H11)、京都府景観資産(H20)、重要里地里山(H27)

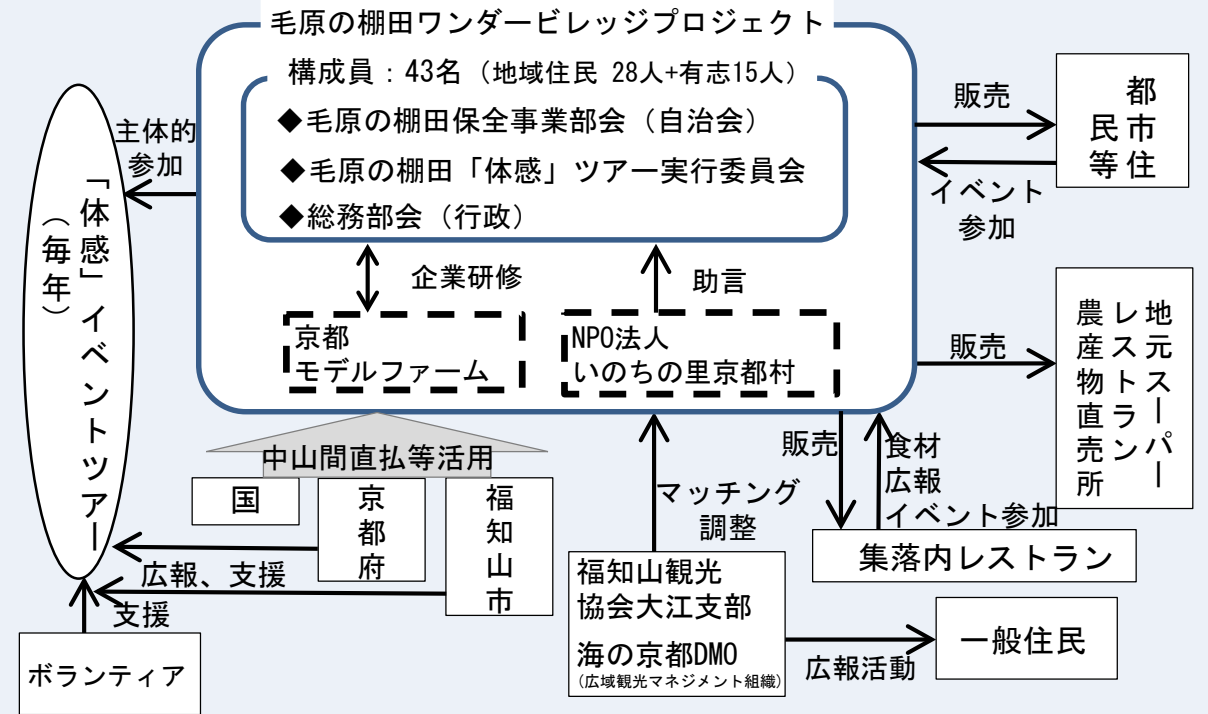


棚田「体感」ツアー

地区の特徴、取組効果

- 集落の話し合いを経て、平成9年から棚田の景観を生かした棚田農業体験ツアー（現在の毛原の棚田「体感」ツアー）を開始（参加人数 毎年140人）。翌年から棚田オーナー制度をスタート。
- 棚田米を使用した純米吟醸酒やどぶろくを特産品として販売。近年は地元農産物加工を行う棚田食品加工所（毛楽里）のクラウドファンディングを活用した建設、ピザ窯の設置などを進め、事業を拡大。ボランティア活動の報酬として地域通貨（けーら）の発行も開始した。新規定住者（8人）や新規就農者（5人）を迎え入れ、自立できるシステムづくりに挑戦している。

棚田保全をめぐる関係図



- キーワード
- 地域内体制整備
- 棚田米販売
- オーナー制度
- 移住促進
- 企業CSR
- 農泊
- 6次産業化
- クラブファン
- 都市農村交流

【事例】 棚田オーナー制度が新规定住者の就農につながり交流事業が一層活性化

☆ 地域の寛容さと結束力がカギ

集落外の都市住民との交流を受け入れる気質から多様な将来像を描ける。

☆ 行政、地域団体の協力がカギ

各組織の持ち味を生かした取組を展開。

きっかけ

過疎・高齢化による集落・農地維持への不安

Step 1 (H2~4)

集落での話し合い

- 「集落話し合い運動推進事業」で集落の将来像について話し合いを重ねた。

集落、行政、地域団体により棚田農業体験ツアー実行委員会を設立 (H9)

地域づくりに取り組む近隣集落の視察

Step 2 (H9~)

棚田農業体験ツアー・オーナー制度等開始

- 散策路・農道整備、東屋・展望台・水車小屋の設置等
- 畦畔管理の省力化と景観形成のため芝桜等を植栽
- 第1回棚田農業体験ツアー(田植え、稲刈り等)の開催
- 景観を武器にレストラン・結婚式場を棚田近郊に誘致
- 棚田オーナー制度スタート(H10、遊休農地への対応)。オーナーは1組5万円の会費で地元農家の指導のもと自ら耕作。受け取る棚田米は1組当たり約120kg。

ふるさと水と土ふれあい事業により整備 (H9~11)

日本の棚田百選に選定(H11)

中山間地域等直払制度の活用を検討(H12)



加工施設



ピザ窯



☆ 外部との議論がカギ

アドバイザー契約を結んだNPOの意見も取り入れ、1000年続く里を目指す中長期計画を策定

美しい農村再生支援事業を活用。主にソフト事業を推進 (H27~28)

☆ 農地の維持管理がカギ

地域ぐるみでの土地改良施設の保全、獣害対策、都市農村交流の推進

中山間地域等直接支払交付金を活用 (H13~)

Step 3 (H13~)

農地の保全 交流施設の整備

- 農道・水路等の維持・改修
- 有害鳥獣対策として電気柵の設置や補修
- 農業体験・都市農村交流施設の改修(調理場、トイレの水洗化等)

高齢化による担い手不足から新たな取組の必要性を認識

いま (H29)

- クラウドファンディングにより食品加工施設の建設・運営
- 加工施設の売上等を原資に地域通貨の運用開始(ボランティアへの報酬としても発行。地元産品の購入やイベント参加費に活用。)
- ふるさと納税への出品(鬼力の棚田米)等

今後の展望

将来に向けて

- ☑ 新たな農産加工品づくりの推進
- ☑ 地域通貨で誘客
- ☑ 散策ガイドツアー
- ☑ 新ビジネスの展開等

Step 5 (H27~)

毛原の棚田ワンダービレッジプロジェクト設立

- 地域内外住民が主体となり、毛原のプロモーション企画・広報、観光誘客、新规定住、商品開発、販路開拓に向けた取組を行う組織を立ち上げ。
- 工業団地を有する有志企業との間で荒廃地の再生や地域交流を目的に協定を締結。

止まらぬ過疎化に住民が危機感



どぶろく工房

Step 4 (H22~)

新たな商品開発の開始

- 新规定住者による農家民宿コテージの開園、棚田米を使用した「どぶろく」の販売、ブルーベリー摘み取り園の開園

農業技術等を習得した棚田オーナーがH18に2名就農・定住し、取組を開始

どぶろく特区認定 (H21)

自治体主体の棚田農業体験ツアーから地域内外有志主体の棚田「体感」ツアーに変更。山野散策等の交流体験が増加 (H25)



○ 移住者(都市住民)の地道な活動が地域住民の信頼獲得につながり、荒廃した農地が復田。個性と知恵を活かせる魅力的な場所として地域おこし協力隊等の若者が結集し、過疎地域の自立の先駆モデルを目指す。

基本情報

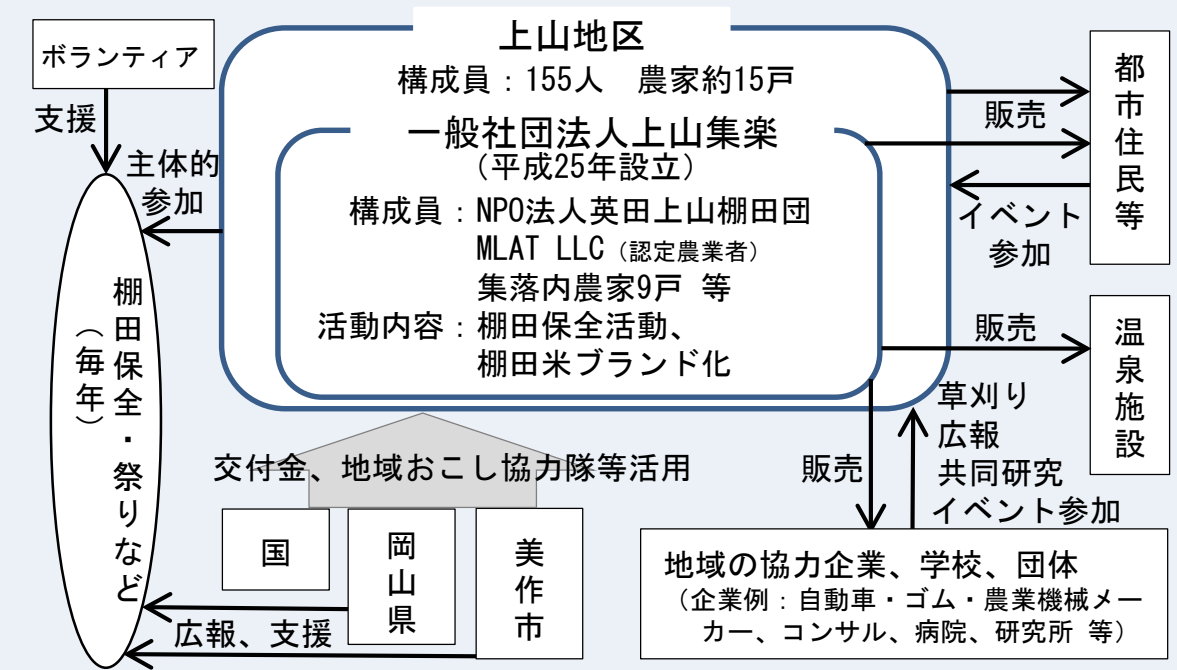
- 所在地：岡山県美作市上山地区
- 総枚数：8300枚（現在復田中）
- 総耕作面積：100ha（現在復田中）
- 耕作率：約30%
- 標高範囲：200～500m
- 平均勾配：19%
- 法面の構造：土羽、石積み
- 開発起源：奈良時代
- 水源：大芦池
- 保全団体：上山区、NPO法人英田上山棚田団、MLAT LLC、一般社団法人上山集楽
- 選定：日本ユネスコ プロジェクト未来遺産(H25)、環境省 第2回グッドライフアワード(H27)、第11回JTB文化交流賞(H28)、農水省 第3回ディズカバー農山漁村の宝(H28)、第3回ジャパン・ツーリズム・アワード(H29)等

地区の特徴、取組効果

- かつては8300枚の壮観な棚田を誇っていた上山の千枚田。少子高齢化とともに一時は90%以上の棚田が荒れてしまうも、一人の移住者をきっかけに再生活動がスタート。水路掃除から始まった活動は再生面積約20haとなり、活動は農業に限らず多様化。現在は人口155人中40人ほどが移住者となっている。
- 収益性があり、人とめぐみをシェアし、大きなインパクトを与えられる新しいビジネスモデルの構築を目指しており、平成27年に一般財団法人トヨタモビリティ基金の助成により「上山集楽みんなのモビリティプロジェクト」を始動したほか、平成29年からは産総研含む提携企業3社と草刈機開発を行っている。海外の棚田地域（台湾八煙集落、フィリピンキアンガン）とも交流している。

- キーワード
- 地域との連携
- 棚田米販売
- 地域おこし協力隊
- 6次産業化
- 企業CSR
- 農泊
- 移住促進
- ソーシャル
- 都市農村交流
- クラファン

棚田保全をめぐる関係図



超小型モビリティ

【事例】もう限界集落と言わせない！未来につなぐ8300枚の棚田再生プロジェクト



荒廃農地の再生活動

☆ 地域住民との信頼関係構築がカギ

地域住民から村の農法を学び、地道な竹林伐採等で徐々に再生地を拡大。伝統と文化の継承も重視し地域の信頼を得る。

☆ 移住者の個性に委ねた多角的な事業展開（半農半X）がカギ

個性豊かな移住者たちが、放置山林、古民家などの未利用資源を活用し、農閑期に各自主体的に6次産業化等に取り組む。楽しく活躍できる場として移住希望者が更に増加し、経営も安定。

きっかけ

H12、大阪から定年移住したA氏が息子B氏を地域の水路掃除の手伝いに呼び



復活した夏祭り（スカイランタン）

再生した棚田



古民家利用に向けた留意点：墓参り時の住居・水利用等を契約時に確認し、所有者の不安をなくすこと。

☆ 古民家を活かしたコンテンツ作りがカギ

棚田同様、見過ごされた地域資源に着目し、日本文化に関心の高い観光客の来訪を促す。

農山漁村振興交付金（農泊推進対策）を活用し滞在型コンテンツを推進（H29～）

Step 3（H23～25）

棚田再生の加速に向けた基盤強化

- 古民家再生※1、棚田大学※2など多方面に事業展開
（※1プロボノやクラファンを活用し棚田再生の拠点となる古民家カフェリノベーション）
 （※2 棚田を舞台に自然と調和した暮らしの技術や昔ながらの知恵を実践を通して学ぶ研修）
 - ・ 棚田再生活動を記した本を3冊出版（出版プロジェクト）
 - ・ 国内外の棚田地域（台湾八煙集落等）との情報交換開始
 - ・ 棚田米を“Merry Rice”と命名し、デパート等で販売開始
- 地域おこし協力隊追加導入による移住者増加。地域おこし協力隊によるMLAT※ LLCが認定農業者として再生の中核に。
（※ Mimasaka Local Activation Team）
- 棚田団・MLAT・地域住民とで「一般社団法人上山集楽」を設立し、地域での独立を目指した活動を加速する（H25）

日本ユネスコ「プロジェクト未来遺産」登録（H25）



棚田米・日本酒

Step 4（H27～）

上山集楽みんなのモビリティプロジェクト始動

- 一般財団法人トヨタモビリティ基金の助成により、経済的持続可能性を確保した中山間地域での移動の社会実験として、超小型モビリティ（電気自動車）を導入・改良。
- 日常・農業・観光といった目的での利用実験開始（H28）。



超小型モビリティ

将来に向けて

- ☑ 棚田再生エリアの拡大
- ☑ 上山集楽のブランド化
- ☑ 攻めの農業実践家育成事業（ワールドファーマーズプロジェクト）の実施とアジア研修生受入開始

今後の展望

いま（H29）

- 移住者38人、棚田再生面積20ha
- 来訪者の増加
- 棚田大学、イベント、講演会、交流会、展示会、マルシェ等も積極的に実施

Step 6（H29～）

農泊事業スタート

- 上山ならではの滞在となるよう、各種ツアー（稲作体験・摘み草）の定期開催、革製品ワークショップ、ジビエ料理提供等、体験型宿泊のための環境整備を進める。

Step 5（H28）

活動拡大

- 地域おこし協力隊追加導入と移住者増加（4人）
- 蕎麦・麦・椎茸栽培、日本酒・ビールの試験醸造、古民家カフェのリニューアル、祭り復活、革製品製造、木工品製造等



○地域おこし協力隊が事務局を担う自主活動組織により棚田の保全活動が活発化している。

基本情報

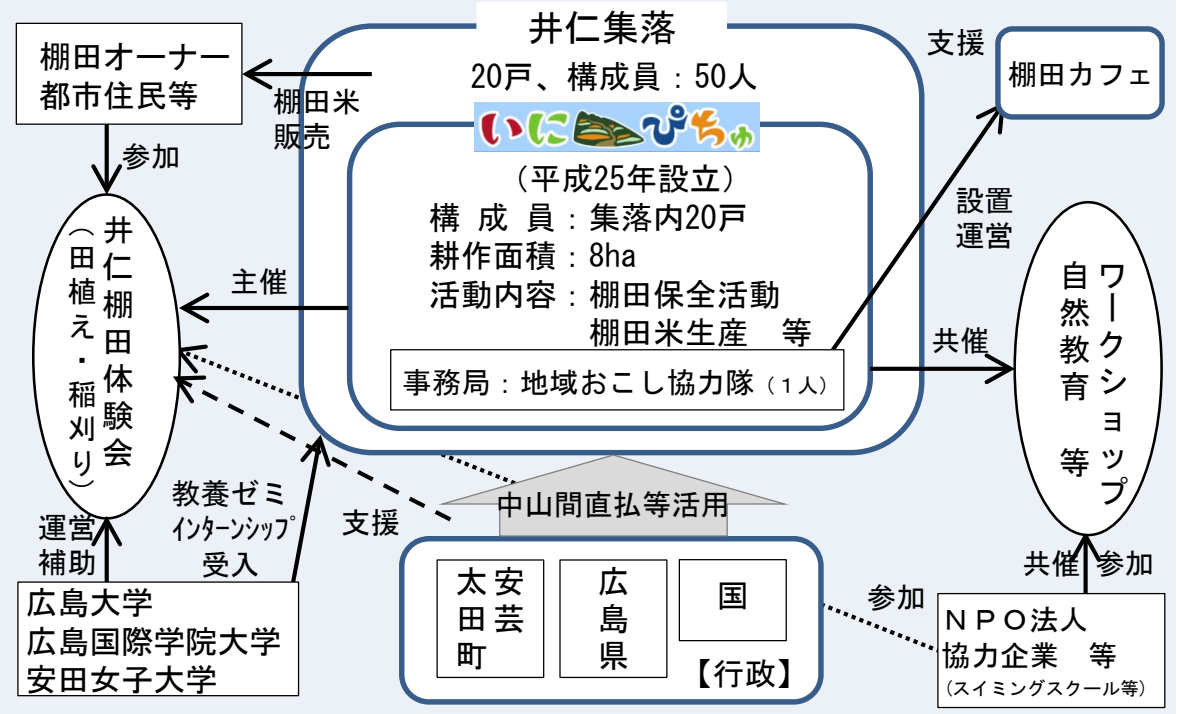
- 所在地：広島県山県郡安芸太田町中筒賀井仁
(広島市中心部から車で60分)
- 枚数：約324枚
- 耕作面積：約8ha
- 耕作率：約85%
- 標高範囲：450～550m
- 平均勾配：1/6
- 法面の構造：石積み
- 開発起源：室町時代後期
- 水源：筒賀川、田ノ尻川（太田川上流）
- 保全団体：いにぴちゅ会
- 棚田オーナー制：7組2.1ha（H25～）
- 選定：日本の棚田百選(H11)、重要里地里山(H27)、日本の最も美しい場所“31選”(H27、アメリカのニュース専門放送局CNN)



地区の特徴、取組効果

- 室町時代後期（約500年前）に整備された石積の棚田を、大学や地域おこし協力隊等と連携して井仁棚田体験会などのイベントを開催するなど、保全活動が定着している。
- 平成27年には、米国CNNの「日本の最も美しい場所」31選に選ばれ、外国人観光客が増加している。
- 平成29年には、地域おこし協力隊が中心となって“棚田カフェ”の建設を進め、不足額100万円はクラウドファンディングで調達した。隊員が店長となり開店し、皆が集える場所となっている。

井仁の棚田保全をめぐる関係図



キーワード

地域内体制整備

都市農村交流

6次産業化

教育

学生

企業CSR

【事例】大学や地域おこし協力隊等と連携した都市農村交流活動の展開

☆ 行政（村長）の提案（発言）がカギ

行政（旧筒賀村長）が棚田を活かした地域活性化策を提案し、地域住民が棚田存続に向けて話し合いを始めた。



第7回（平成17年）から「井仁棚田体験会（田植えの部、収穫の部）」に名称を変更

☆ メディア露出がカギ

県内で唯一選定されたことにより、テレビ等のメディアの取材が増加。知名度が上がり、行事の参加者が増加し、活動が軌道に乗った。

きっかけ

「桃源の里井仁」づくり基本構想の策定（平成9年11月旧筒賀村）

- ・地域の過疎化・高齢化
- ・猪等の獣害による生産意欲の減退
- ・棚田の維持管理が困難

Step 1 (H10~H12)

棚田地域等緊急保全対策事業の実施

- 獣害対策として、集落周りに獣害防護柵（約4km）を設置。（既存のトタン板から金網に変え、景観にも配慮）
- 農道の新設・改良により、生活環境の改善及び棚田の維持管理労力の節減を図る。



棚田体験会（田植えの部）



棚田カフェ（イニミニマニモ）



馬耕体験会

☆ 地域おこし協力隊の活動がカギ

隊員自ら“いにぴちゅ会”の事務局として行事の参加者を受け入れる体制を整え、各種団体と連携したイベントも運営。現在2代目。

旧筒賀村が整備

多面的機能支交付金を活用し、石垣補修や畦畔草刈り等を実施（H26~）

農山漁村振興交付金を活用し都市農村交流を推進（H27~）

日本の棚田百選に選定（H11）



Step 3 (H14~)

展望台・休憩所・案内看板の設置

- 下から見上げる位置に丸太組の展望台を設置。
- 棚田の説明看板も設置し、観光客から好評を得ている。

Step 4 (H22頃~)

大学・企業等との連携

- 地域の大学生が井仁棚田体験会の運営補助や石垣清掃、草刈等を手伝い、ゼミも実施。
- 環境NPOや地域のスィミングクラブが、子供のための自然教育やワークショップを開催。



女子大学生による石垣清掃

Step 5 (H25~)

自主活動組織の発足

- 自治会の中に、地域自主活動組織である“いにぴちゅ会”を発足。
- 棚田オーナー制度を開始。
- 休校となった井仁小学校を“井仁棚田交流館”にリニューアルし、交流時の着替えや簡易宿泊所として活用。
- 子育て中の女性を中心とした「森のようちえん」や、野草を採取して食べる「野草の会」等を共催。

いま (H29)

- 棚田体験会、馬耕体験会、野草の会、大学インターンシップ、オーナー制度等を継続実施。
- 棚田カフェを開設【H29.9】（内装はDIY。不足額はクラウドファンディングを活用し、資金調達と同時に棚田をPR。）

今後の展望

将来に向けて

- ☑ 持続的な保全活動
- ☑ 営農を継続していくための負担軽減、労力確保
- ☑ 地域にお金が落ちる仕組みづくり（特産品づくり）



○集落の結束を活かした棚田保全事業の地道な取組により、イベントへの来訪者は年々増加。行政の支援や制度を活用することで棚田米のブランド化やイベントの活性化につなげている。

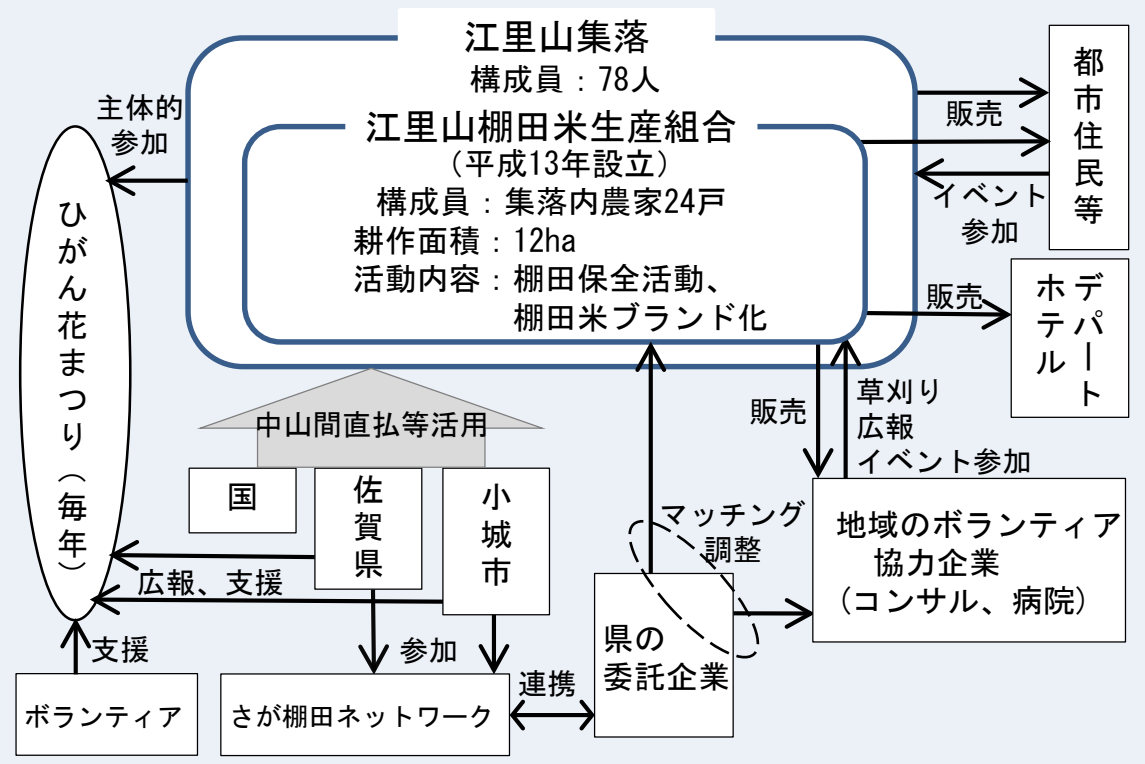
基本情報

- 所在地：佐賀県おぎし小城市おぎまち岩蔵いわくら
(小城駅から車で10分)
- 枚数：約600枚
- 耕作面積：約12ha
- 耕作率：約80%
- 標高範囲：170~250m
- 平均勾配：1/5 (or 1/10)
- 法面の構造：土羽、石積み
- 開発起源：中世
- 水源：江里山川
- 保全団体：江里山棚田米生産組合
- 選定：美しい日本のむら景観百選(H3)、日本の棚田百選(H11)、22世紀に残す佐賀県遺産(H20)、重要里地里山(H27)

地区の特徴、取組効果

- 昔ながらの狭隘で不整形な石積み景観を維持し、群生する彼岸花を「ひがん花まつり」にあわせて地区いっせいに咲かせることで、集落の一体感とのどかな里山の空気を感じることが出来る。小城市の重要な観光資源として、1日の来訪者数は、H23の600人からH29は1200人にまで増加している。
- 米は棚田米として集落で管理し、独自の販売ルートにより2,700円/5kgで直売。H28年産米の出荷実績は6ト。

江里山の棚田保全をめぐる関係図



キーワード

地域内
体制整備

都市農村交流

棚田米販売

企業CSR

【事例】集落の結束と行政の協力によりイベントの集客増加、米の販路拡大に取り組む

☆ 地域の結束力がカギ

「棚田と彼岸花の里づくり」を目指したむらづくりのため、集落で話し合いを重ねた。

☆ 行政の協力がカギ①

広報は市・県が担当し、「江里山＝彼岸花」が定着。

きっかけ

「棚田と彼岸花の里」として、平成3年に美しい日本のむら景観百選に選定



将来に向けて

- ☑ 米の販売網を一層整備
- ☑ 安定した農家レストランの経営
- ☑ 後継者不足への対応

今後の展望

いま (H29)

- まつりの規模や参加者は年々拡大
- 遊休地を活用しコスモス等を植栽
- 棚田米がふるさと納税返礼品に

☆ 行政の協力がカギ②

佐賀県職員の営業活動によりボランティア企業を開拓。

県の棚田基金を活用し、棚田ボランティアを募集 (H28～)

多面的機能支払交付金を活用して農道等を整備 (H19～)

Step 5 (H29～)

地元企業との連携

- 地元企業による草刈りボランティア (H29参加者50人)、地元病院による農作物の購入支援、イベント・広報活動支援

Step 1 (H4～)

農業農村整備事業の活用

- 小さな棚田や美しい曲線の畦を残し、彼岸花が咲く環境を守るため、畦の内側だけにコンクリートを打ち込んだ
- 公園、水道、広場等の整備を実施

Step 2 (H10～)

ひがん花まつり開催

- 地元アーティストのコンサート、かかしコンテスト開催
- 棚田米やおにぎり、こんにゃく等の農産物加工品販売
- 地区内の高齢者が率先して準備から本番まで実施
- 来訪者、リピーターは年々増加 (まつりの来訪者数は、H23:600人⇒H29:1200人)

☆ ブランド化がカギ

地域で話し合い、ブランド化路線を決定。高値での直販先を開拓。

中山間地域等直接支払交付金を活用して色選機等を購入 (H13～)

中山間直払交付金の活用を検討 (H12)

Step 3 (H13～)

生産組合の設立、米のブランド化

- 菜の花の漉き込みによる化学肥料の低減、色選機・精米機・低温貯蔵庫の導入により佐賀県特別栽培米に認定。
- 「棚田米」としてデパート、ホテルへ販路拡大。

Step 4 (H19～)

農道整備

- 労力軽減のため、地域ぐるみでの農道・水路の保安全管理、機械搬入のための農道整備を実施。

高齢化による慢性的な人手不足

棚田百選に選定 (H11)



キーワード
地域内
体制整備
棚田米販売
学生
教育
都市農村交流
企業CSR
6次産業化

○組織化を通じて棚田米のブランド化に成功。景観を活かす棚田保全事業は集落ぐるみの取組から地域の大学や企業の支援を受けた取組に発展し、都市住民との多様な交流につなげている。

基本情報

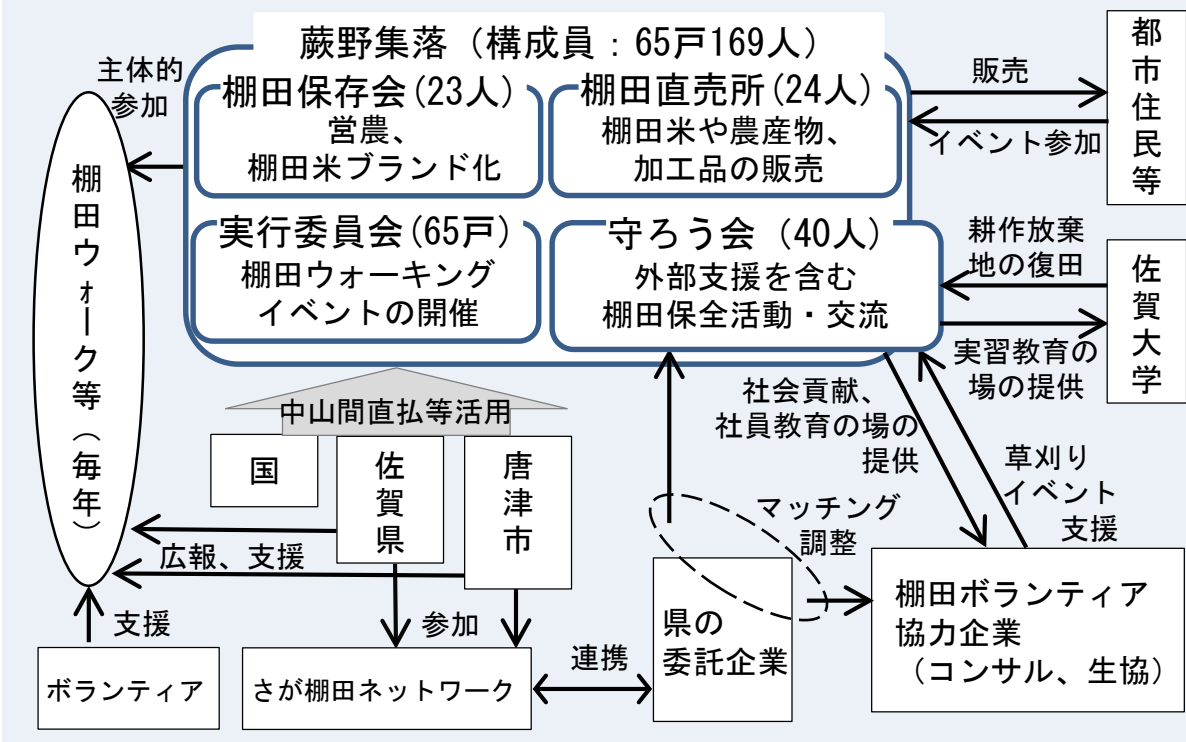
- 所在地：佐賀県唐津市相知町平山上からつし おうちょう ひらやまかみ
(相知駅から車で15分)
- 枚数：約700枚
- 耕作面積：約33ha
- 耕作率：約88%
- 標高範囲：130~400m
- 平均勾配：1/4
- 法面の構造：石積み
- 開発起源：江戸時代初期
- 水源：平山川
- 保全団体：①蕨野棚田保存会、②蕨野棚田直売所、③棚田と菜の花実行委員会、④NPO法人蕨野の棚田を守ろう会
- 選定：日本の棚田百選(H11)、日本遊歩百選(H14)、重要文化的景観(H20)、重要里地里山(H27)



地区の特徴、取組効果

- 棚田の規模が大きく高さ8.5mの高石積を有し、「国の重要文化的景観」にも選定されている蕨野の棚田を活かした地域づくりを推進するため、地域住民の団結で集落ぐるみの取組が実施され、大学等の外部支援を受けた交流イベントも開催されている。
- 米は棚田米としてJAカントリーにて他地区と区分管理し、低温乾燥調整や注文に合わせて精米出荷販売する体制を確立し、3,150円/5kgで直売。H28年産米の保存会販売実績は23.8トﾝ。

棚田保全をめぐる関係図



【事例】 棚田の魅力を活かす地域ぐるみの交流促進で棚田米のPRと地域活性化に取り組む



きっかけ

美しい農村景観を有するものの、高齢化、担い手減少により、耕作放棄地が増加

日本の棚田百選に選定 (H11)



☆ 地域の結束力がカギ

「棚田」を活かした地域づくりを進めようという思いから、地域住民の団結力で集落ぐるみの取組が生まれた。

☆ 棚田米のブランド化がカギ

地域で話し合い、生活雑排水が一切入らない棚田米の魅力を生産者に伝える体制を確立し、販路を開拓することにより、稼げる仕組みを作った。

中山間地域直接支払交付金を活用し、棚田米パッケージを製作し、共同利用機械を購入 (H12～)

Step 1 (H13)

棚田保全組織の設立と棚田米のブランド化

○ 町主導で地域活性化に向けた交流事業を担う「棚田と菜の花実行委員会」を設立。「第1回早苗と棚田ウォーク」を開催したところ、900人ももの都市住民が来訪。地域住民は驚くとともに、お米を参加者に売りたいとの意見が出るようになる。

○ 住民有志で営農や棚田保全を担う「麓野棚田保存会」を発足。品質とパッケージを統一し、「棚田米麓野」販売開始。棚田の良さを体感したイベント参加者から多くの注文があり自信に。町長のトップセールスでデパートや有名ホテルにも販路を拡大。

特別栽培米の認証 (H15)

佐賀大学と地域交流協定を締結。耕作放棄地を営田とするなど年100人の援農隊を受入れ。(H15)

Step 2 (H14～H18)

交流拠点の整備

○ 棚田サミットや交流事業の推進に向けて、農産物の販売や来訪者への案内を行う直売所を建設
○ 直売所では地元の女性が活躍

里地棚田保全整備事業を活用し、交流広場や展望所等を整備

中山間地域直接支払交付金を活用し、直売所を整備(H16)

☆ 外部からの支援がカギ

資金面、人材面で地元企業等から助成。
県の基金で棚田ボランティアを募集(H28～)
中山間直払や市の助成をイベント経費に活用

☆ 外部支援を受け入れる体制整備がカギ

地元大学等多様な主体が地域住民と協力して交流イベントを開催する体制を構築。

全国棚田サミット開催 (H16)

重要文化的景観に選定 (H20)

いま (H29)

○ 米のブランド力向上
○ 3企業と協定締結
○ 直売所には年間2,600人来訪。煎餅等米加工品も販売。一部住民は農泊、そば処にも着手。

今後の展望

将来に向けて

- ☑ 後継者不足への対応
- ☑ 継続したイベント開催に向けた体制整備

Step 5 (H24～)

企業等の支援

○ 連携企業の社員等による草刈り、イベント運営の支援を受けるほか、稲作体験教室も実施

Step 4 (H22～H25)

棚田保全整備

○ 営農継続に向けた労力軽減のため、補強畦畔を整備
農山漁村活性化プロジェクト支援交付金を活用

Step 3 (H21～)

NPO法人の設立

○ 重要文化的景観の選定を契機に「NPO法人麓野棚田を守ろう会」を設立し、地域住民が主体となって棚田や里山の保全、交流事業を実施
○ 地域住民、佐賀大学卒業生等で構成



○ 地域資源の見直しと地域内体制整備により、女性や若者が生き生きと6次産業化に取り組み、滞在型グリーンツーリズムも大成功。若者が自然と集まり、限界集落の未来をつくるモデル地域となっている。

基本情報

- 所在地：宮崎県にしうすきぐん たかちほちょう むこうやま西臼杵郡高千穂町向山
(高千穂町中心部から車で30分)
- 枚数：119枚
- 耕作面積：約4.3ha
- 耕作率：約100%
- 標高範囲：500m~600m
- 平均勾配：1/6
- 法面の構造：土羽
- 開発起源：不明
- 水源：諸塚山(湧水)
- 保全団体：高千穂ムラたび協議会
- 選定：世界農業遺産認定地域内(H27、高千穂郷・椎葉山の山間地農林業複合システム)、第3回ディスカバー農山漁村の宝(H28)

地区の特徴、取組効果

- 人口100人のうち60歳以上が7割の限界集落にありながら、①棚田を中心とした農村景観や地域の神話史跡を活かしたムラづくり(ムラごとエコミュージアム)と、②地域の女性たちが運営する古民家食堂や民宿で希少な地産食材を提供することで、年間3万人以上の交流人口を創出している。
- 移住者を含む若者が中心となった(株)高千穂ムラたびでは、集落農家と共同で原料米の供給体制を構築し、高値で買い取った棚田米から、専門機関と連携してどぶろく・あまざけを生産し、約1億円の売上から雇用や地域還元の内経済循環を創出している。

キーワード

地域内体制整備

ソシヤルビジネス

都市農村交流

移住促進

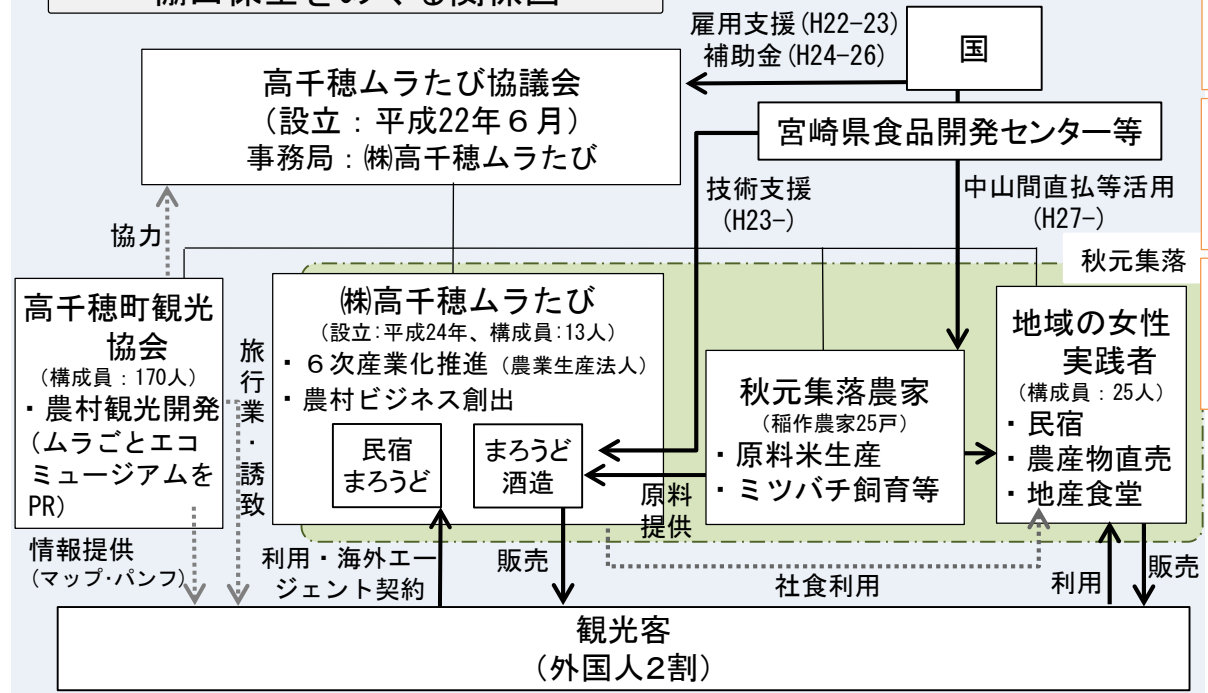
農泊

地域おこし協力隊

6次産業化

クラファン

棚田保全をめぐる関係図



【事例】 中間支援組織の活用と情報の分析で集落に全員参加型の生業を創る

☆ 任意団体としてのスタートがカギ

協議会としての助走期間(H22~23)を設け、法人化後の倒産リスク回避。

宮崎県の雇用対策支援(H22~23)

きっかけ

田舎で働き隊の若者たちがアンテナショップを開催し、触発された女性たちが無人直売所「いろはや」を開設(H21)

Step 1 (H22)

ムラたび協議会の設置

- これらの取組に対して、現場でマネジメントする人が必要と感じた行政マンが早期退職し、法人格を持たない協議会を設置。
- 地域資源の見直しと多角的農村ビジネスを検討。加工と民宿を試行。

竹かづら、銀粘土、牛脂石けんに取り組むも、競合品に勝る優位性がなく、失敗。

民宿も赤字。旅行者のニーズ分析と地域の特性分析との突合ができていなかったことが原因。

食と地域の交流促進対策交付金(H24~26)を活用し、「世界に通用するものづくり」と「食や観光の魅力づくり」を基本理念に、観光と連携した農村産業(直売、食堂、民宿、加工、ムラごとエコミュージアム)の創出と滞在型旅行モデルのモニタリングを実施。



Step 2 (H23~)

どぶろく造り

- 旧牛舎を改装し個人事業として製造開始
- 県の食品開発センターに協力依頼

Step 3 (H24)

(株)ムラたびの設立(法人化)

- どぶろく「千穂まいり」完成
- 民宿試行後3年目で初の黒字
- その他、体験事業(夜神楽体験)等

☆ 専門機関の利用がカギ

研究開発部門を破格値で外注しているようなもの。開発当初からの情報蓄積により、トラブル回避も容易に。輸出の市場開拓はJETROに相談。

古民家を改築し、地域の女性による地産食堂「しんたく」を開設。

☆ 滞在交流型がカギ

地産食材による接遇や体験・現地ツアーの実施で民宿ファンを獲得。

☆ こだわり商品としての営業がカギ

類似しない付加価値(乳酸菌)と秋元の神秘的なストーリーとを結びつける。デザインと情報の高度化も重要。

Step 4 (H26~)

あまざけ販売

- 製菓メーカーと連携し、乳酸菌入りあまざけ「ちほまる」完成

☆ 情報発信がカギ

多様な販路を開拓。

Step 5 (H27~)

原料の共同生産体制整備

- どぶろく・あまざけ生産の本格化により、住民連携による原料米の共同生産体制を整備。耕作放棄地の復田と、今後耕作困難になった場合の耕作請負合意。
- 助成は共同利用機械の購入、食堂の駐車場整備等に活用。

秋元集落、中山間直接支払交付金導入(H27~)

Step 6 (H29~)

クラファン活用

- クラウドファンディングのサイトを利用したオーダーメイドどぶろくの販売

フランス旅行会社との2年契約等

食堂の収益増のため、(株)ムラたびの食堂として利用開始(H28~)

将来に向けて

- ☑ 生産規模・外国向け販路拡大
- ☑ 旅行者の滞在拠点づくり
- ☑ 他地域へのコンサルティング活動

今後の展望

いま (H29)

- 棚田の耕作率100%
- 新規雇用2人(雇用者数14人)、研修生年間8人
- 民宿の利用者は600人(H29)。どぶろく・あまざけの売上は1億円(H29)